

十郎丸長谷古遺跡

福岡県久留米市北野町十郎丸所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第280集

2023

九州歴史資料館

十郎丸長谷古遺跡

福岡県久留米市北野町十郎丸所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第280集

2023

九州歴史資料館

序

本報告書は、令和2・3年度に主要地方道久留米筑紫野線道路建設事業に伴い福岡県県土整備部久留米県土整備事務所からの執行委任を受けて発掘調査を行った、久留米市北野町十郎丸に所在する十郎丸長谷古遺跡の発掘調査報告書です。

十郎丸長谷古遺跡の調査では弥生時代後期の甕棺墓・竪穴遺構、奈良時代の竪穴住居跡、鎌倉時代・江戸時代の溝から弥生土器・土師器・須恵器・近世陶器・磁器などが出土し、これまで知られていなかった十郎丸地区での歴史が解明されました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、久留米県土整備事務所や久留米市文化財保護課の関係諸機関の方々に、ご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

令和5年3月31日

九州歴史資料館

館長 城戸 秀明

例 言

- 1 本書は主要地方道久留米筑紫野線道路建設事業に伴い、令和2・3年度に九州歴史資料館が発掘調査を実施した、福岡県久留米市北野町十郎丸字野屋敷に所在する十郎丸長谷古遺跡の発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査および報告書作成は福岡県県土整備部久留米県土整備事務所からの執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真および遺物写真の撮影は坂本真一が行い、遺物写真は北岡伸一（埋蔵文化財調査室）の協力を得た。空中写真撮影はワールド・フォト・サービスによるドローン撮影を委託した。
- 4 本書に掲載した遺構図の作成は坂本が行い、遺物実測図は坂本と整理作業員が作成した。
- 5 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において実施した。
- 6 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
- 7 本書に使用した第2図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000、「鳥栖」を一部、改変したものである。本書で使用した方位は座標北である。
- 8 本書の執筆と編集は坂本が行った。

目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査・整理の組織	1
II	遺跡の位置と歴史的環境	2
III	十郎丸長谷古遺跡の調査	8
1	調査の概要	8
2	弥生時代の遺構	8
2-1	縦穴遺構	8
2-2	甕棺墓	14
2-3	土坑	19
3	奈良時代以降の遺構	23
3-1	縦穴住居跡	23
3-2	掘立柱建物跡	36
3-3	土坑	37
4	溝	37
5	ピット出土遺物	44
6	遺構検出出土遺物	47
IV	まとめ	47

挿図目次

第1図	福岡県久留米市位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	十郎丸長谷古遺跡全体図 (1/300)	5・6
第4図	十郎丸長谷古遺跡詳細図 (1/1,000)	7
第5図	1・2号竪穴遺構実測図 (1/40)	9
第6図	1号竪穴遺構出土遺物実測図1 (1/3)	10
第7図	1号竪穴遺構出土遺物実測図2 (1/3)	11
第8図	1号竪穴遺構出土遺物実測図3 (1/3)	12
第9図	1号竪穴遺構出土遺物実測図4 (1/2、1/6、1/3)	13
第10図	2号竪穴遺構出土土器実測図1 (1/3)	15
第11図	2号竪穴遺構出土土器実測図2 (1/3)	16
第12図	甕棺墓および土坑実測図 (1/20、1/40)	17
第13図	甕棺実測図 (1/6)	18
第14図	1号土坑出土土器実測図 (1/3)	20
第15図	3号土坑出土土器実測図 (1/3)	21
第16図	4号土坑出土土器実測図 (1/3)	22
第17図	1号竪穴住居跡実測図 (1/40)	23
第18図	2号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/30)	24
第19図	3・4号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/30)	26
第20図	1～3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	27
第21図	6号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/30)	28
第22図	6号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/2、1/3)	29
第23図	7～9号竪穴住居跡実測図 (1/40)	31
第24図	10号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/30)	32
第25図	11・12号竪穴住居跡実測図 (1/40)	33
第26図	7～12号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/2、1/3)	34
第27図	1号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)	35
第28図	2号土坑出土遺物実測図 (1/2、1/3)	36
第29図	1～6・12～14号溝土層断面実測図 (1/40)	39
第30図	1～6・12～14号溝出土遺物実測図 (1/4、1/3)	41
第31図	18～22号溝土層断面実測図 (1/40)	43
第32図	18・19号溝出土遺物実測図 (1/3)	44
第33図	ピット出土土器実測図 (1/3)	45
第34図	遺構検出出土遺物実測図 (1/3)	46

図版目次

図版 1	1	十郎丸長谷古遺跡合成写真（真上から）	
図版 2	1	調査区南側全景（真上から）	2 調査区北側全景 1（真上から）
	3	調査区北側全景 2（真上から）	
図版 3	1	遺跡周辺（東から）	2 遺跡周辺（南西から）
	3	遺跡周辺（北から）	
図版 4	1	1号竪穴遺構（南東から）	2 1号竪穴遺構土器出土状況（南東から）
	3	2号竪穴遺構（南西から）	
図版 5	1	甕棺（東から）	2 甕棺（南から）
	3	1号土坑（南から）	4 3号土坑（南から）
図版 6	1	1号竪穴住居跡（南から）	2 2・3号竪穴住居跡（南東から）
	3	2号竪穴住居跡竈（南東から）	4 3号竪穴住居跡竈（南東から）
図版 7	1	2号竪穴住居跡（南東から）	2 4号竪穴住居跡（西から）
	3	6号竪穴住居跡（南から）	
図版 8	1	6号竪穴住居跡竈（南から）	2 6号竪穴住居跡土器出土状況（南東から）
	3	7～9号竪穴住居跡（南東から）	4 8号竪穴住居跡（南東から）
図版 9	1	10号竪穴住居跡（東から）	2 10号竪穴住居跡竈（東から）
	3	11号竪穴住居跡（南東から）	4 12号竪穴住居跡（南から）
図版 10	1	1号掘立柱建物跡（北東から）	2 P201（南西から）
	3	2号土坑（南西から）	4 1・2号溝（南から）
	5	1号溝土層（南から）	6 2号溝土層（南から）
図版 11	1	3号溝（西から）	2 4号溝（南から）
	3	4号溝土層（南から）	4 5号溝西 1（東から）
	5	5号溝西 2（西から）	6 5号溝土層 a（西から）
	7	5号溝土層 b（東から）	8 6号溝（東から）
図版 12	1	6号溝土層 a（東から）	2 6号溝土層 b（東から）
	3	12・13号溝（西から）	4 14号溝（東から）
	5	18号溝北（南から）	6 18号溝北土層（南から）
	7	18号溝南（南から）	8 18号溝南土層（南から）
図版 13	1	19号溝土層（北から）	2 19号溝土層 a（北から）
	3	19号溝土層 b（北から）	4 20号溝土層（東から）
	5	21号溝（西から）	6 21号溝土層（西から）
	7	22号溝（西から）	8 22号溝土層（西から）

図版 14 出土土器 1

図版 15 出土土器 2

図版 16 出土土器 3

図版 17 出土土器 4

図版 18 出土土器 5 ・ その他出土遺物



I はじめに

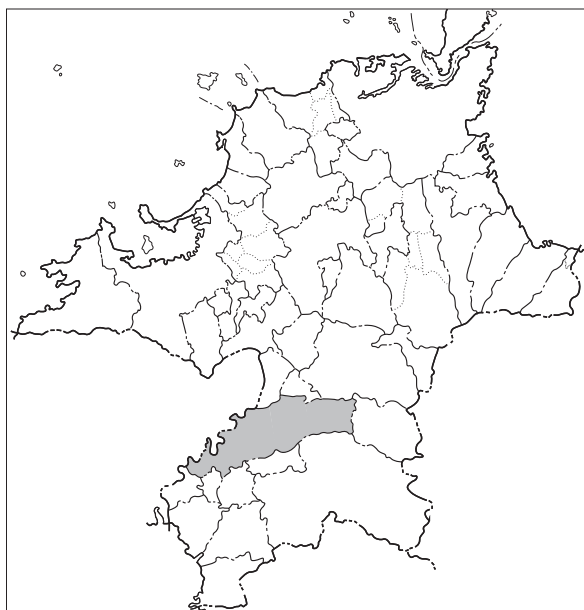
1 調査に至る経過（第1図）

主要地方道久留米筑紫野線（県道）は、福岡県久留米市御井町を起点とし、筑紫野市永岡に至る延長約 22km の道路で、久留米市域と福岡都市圏を繋ぐ重要な幹線道路である（※）。

これまで用地買収が済んだ地点から久留米市文化財保護課が試掘・確認調査を実施し、久留米市北野町十郎丸付近で一部遺跡（約 7,000㎡）が確認されていた。今回の調査対象地である久留米市北野町十郎丸は、令和 2 年 8 月末に福岡県県土整備部久留米県土整備事務所から久留米市文化財保護課に対し、遺跡が確認されている箇所

の一部（約 4,000㎡）について令和 3 年度から橋脚工事に入りたいとの相談があった。令和 2 年 9 月 14 日、久留米県土整備事務所と久留米市文化財保護課との協議に、福岡県教育庁教育総務部文化財保護課と九州歴史資料館埋蔵文化財調査室も加わり、4 者で今後の工事の進捗状況などを確認した。その結果、久留米市では近年、民間開発による発掘調査事業量が多く対応が困難のため、九州歴史資料館が令和 2 年度の後半から発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、まず南側の 3 / 4 について令和 2 年 11 月 9 日～令和 3 年 3 月 22 日にかけて調査を行い、残り 1 / 4 の北側を令和 3 年 5 月 24 日～6 月 11 日にかけて九州歴史資料館が調査を担当した。

（※久留米県土整備事務所発行パンフレットによる）



第1図 福岡県久留米市位置図

2 調査・整理の組織

令和 2・3 年度の発掘調査と令和 4 年度の整理・報告に関わる関係者は次のとおりである。

	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度
福岡県教育委員会			
教育長	城戸秀明	吉田法稔	吉田法稔
副教育長	木原 茂	寺崎雅巳	上田哲子
教育総務部長	上田哲子	上田哲子	松永一雄
九州歴史資料館			
館長	吉田法稔	城戸秀明	城戸秀明
副館長	安永千里	安永千里	吉村靖徳
総務室長	伊藤幸子	伊藤幸子	黒岩計光
総務班長	畑山 智	高山美保子	高山美保子

主任主事	古賀知香 田中佑弥	古賀知香 小原大輔 田中佑弥	古賀知香 小原大輔
主事			原口美紀
文化財調査室長	吉村靖徳		
埋蔵文化財調査室長		吉村靖徳	吉村靖徳（副館長兼務）
文化財調査室長補佐	伊崎俊秋		
文化財調査班長	森井啓次	森井啓次	森井啓次
技術主査	坂本真一（調査）	坂本真一（調査）	坂本真一（報告）

発掘調査にあたっては、発掘作業員の方々をはじめ、久留米県土整備事務所道路建設課および久留米市文化財保護課や多くの方々のご協力によって円滑に進めることができました。ここに記して感謝いたします。

II 遺跡の位置と歴史的環境

十郎丸長谷古遺跡は、福岡県南部の筑後地方の北部、久留米市北野町に所在する。現在の久留米市は、平成17年2月5日に久留米市、田主丸町、北野町、城島町、三瀧町が合併した新しい久留米市である。福岡県内では、政令指定都市である福岡市・北九州市に次ぐ3番目の中核市で人口約30万人を超える大都市である。

久留米市北野町は福岡県中央部の筑紫平野の東側にあり、西日本最大の沖積平野に位置し、標高10m以下の低平地が福岡県中央～佐賀県南部にかけて広がっている（※福岡県第182集 下山正一による）。遺跡の南側には一級河川の筑後川が流れ、それに向かって北東から南に向けて大刀洗川・陣屋川・小石原川などが流れる。これまで十郎丸長谷古遺跡の周辺は、弥生時代～中世の遺跡として十郎丸遺跡・古町遺跡・十郎丸長谷古遺跡が周知の包蔵地として認識されていた。近年、古町遺跡1次調査で発掘調査が行われ、江戸時代頃の積土遺構や建物跡が発見された。それ以外は発掘調査はなく、当遺跡に関連した周辺の状況が掴みにくい。ここでは、北野町内で報告された遺跡を中心に概観する。

縄文時代の目立った遺跡は少なく、久留米市北野町内の各所では後期～晩期にかけての遺物が確認されている。赤司一区公民館遺跡では、晩期頃の土坑から多頭石斧が出土した。良積遺跡でも遺構には伴わないが、扁平打製石斧や搔器や多頭石斧8点、姫島産黒曜石で作られた釣り針などの石製漁具も出土した。その他に、定格遺跡では縄文時代後期末の広田式と晩期の御領式の土器、餅田遺跡では後期後半の三万田式や晩期頃の土器、八勝負遺跡では晩期の石器が出土した。

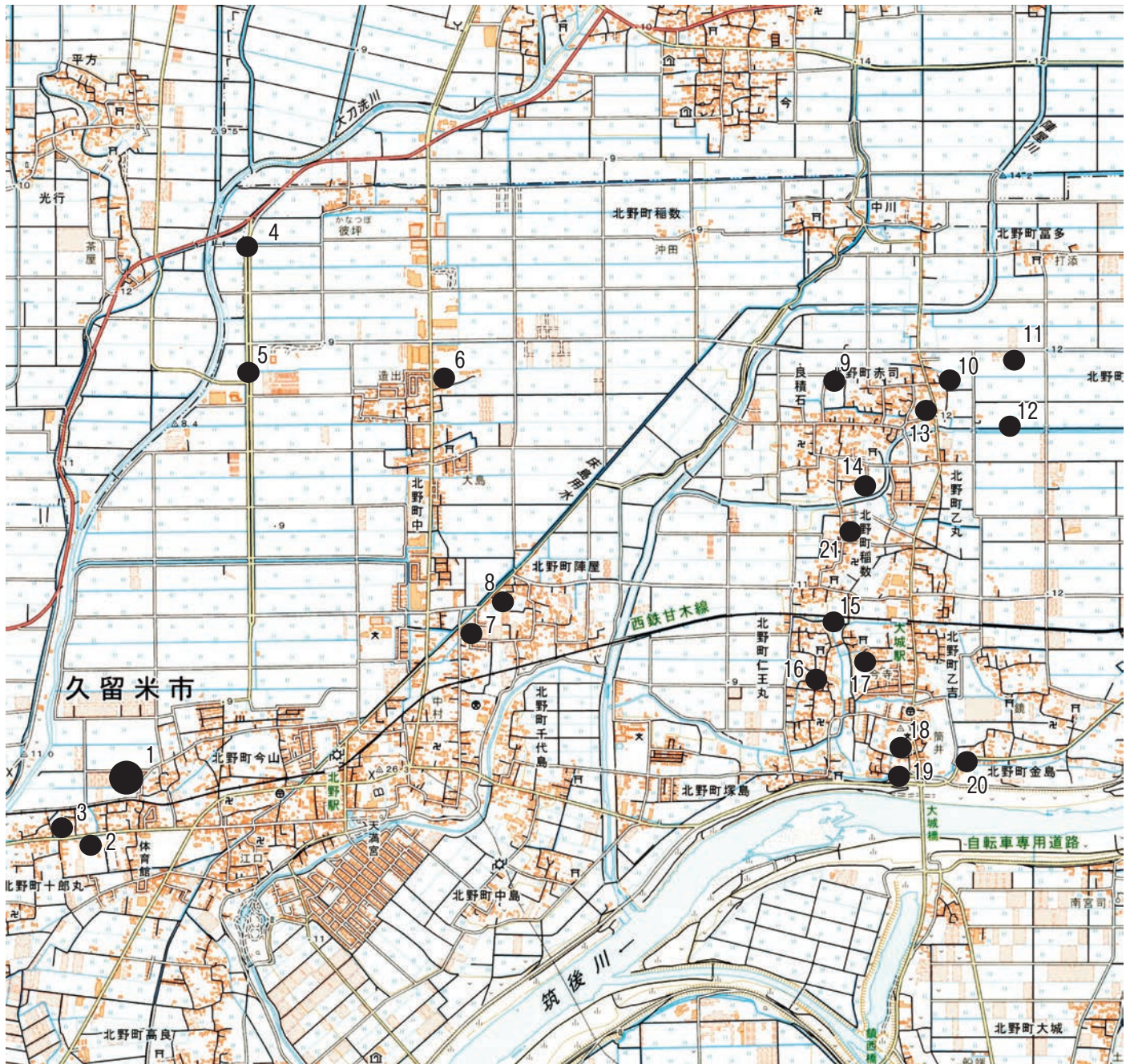
弥生時代では、今寺遺跡・餅田遺跡・良積遺跡・赤司城跡・仁王丸遺跡・大城中筒井遺跡・北大手木遺跡・彼坪遺跡など多くの遺跡で集落跡や墓跡を発見する。今寺遺跡は弥生時代前期～後期頃の遺跡で、前期の小児棺の甕棺墓9基や堅穴住居跡を検出した。餅田遺跡は中期から後期にかけての遺跡で、甕棺墓43基、土壙墓9基、祭祀土壙を検出した。主な時期は中期中葉頃に集中し、成人棺18基、小児棺17基がある。また同時期には高低差（約4m）を利用して高い所を墓域とした

大城中筒井遺跡がある。ここでは、甕棺墓 68 基、石棺墓 20 基、祭祀土壙 4 基をつくり、筑後川に近い南側の低い所は水田に利用していた。出土遺物の中には、甕棺に瓢形土器を利用した小児棺や甕棺内部に人骨は伴っていないが石剣の一部も出土するなど「倭国大乱」を示す痕跡なのかもしれない。この一帯で特に注目すべき遺跡は良積遺跡で、久留米市北野町内で最大の遺跡である。前期～後期にかけて、竪穴住居跡 160 軒、井戸 250 基、掘立柱建物 36 棟、前期と終末期の環濠 4 条や甕棺墓 35 基と中期後半～古墳時代前期にかけての周溝状遺構 40 基を検出した。部分的な報告だけだが、甕棺墓は中期初頭から終末期にかけてあり、特に後期後半にかけて多く検出した。その中で 14・28 号甕棺墓からは青銅鏡（方格規矩鏡舶載鏡・小型内行花文仿製鏡）、16 号甕棺墓は鉄製ヤリガンナ、20 号甕棺墓からは鉄鎌・鉄製ヤリガンナ・鉄鎌、29 号甕棺墓ではガラス製勾玉が出土する。周辺の遺跡の甕棺墓よりも副葬品が豊富である。さらに前期末～後期前葉にかけての遺跡では、北野町内西側にある彼坪遺跡や北大手木遺跡がある。特に彼坪遺跡では竪穴住居跡 80 軒、土坑 259 基、甕棺墓 1 基、掘立柱建物跡 7 棟、環濠 17 条（内環濠 2 条）を検出するなど、良積遺跡のような拠点集落である。この他にも中期には、仁王丸遺跡で朝鮮系無文土器が出土するなど渡来人との関係を示す痕跡もある。

古墳時代～奈良時代では、定格遺跡・古賀ノ上遺跡・良積遺跡がある。定格遺跡では古墳時代前期の竪穴住居跡、土壙墓、木棺墓が検出した。古賀ノ上遺跡（※図面の関係上、位置の記載なし）では、7 世紀の集落跡と 8 世紀後半～9 世紀にかけての官衙遺構が検出した。集落跡からは竪穴住居跡 22 軒、井戸 5 基、土坑 21 基が検出された。竪穴住居跡のカマドはほとんどが北側に設置され、唯一東側に設置していた突出型カマドは、外に煙道を延ばすタイプであった。その他、井戸や土坑からは「内」「兵」「内部?」「寺」と書かれた墨書土器や「東」「内」と書かれた刻書土器と転用硯も出土する。官衙遺構は 7×2 間の東西廂をもつ後殿と 3×2 間の前殿や左右脇殿が口の字型に配列され、建物跡は 2～3 度立て直しも行われていた。南西の隅には正倉と思われる 3×3 間の総柱建物跡もある。なお、建物跡の中央には空間地が広がり、そこから緑釉陶器片が出土するなど、何らかの役所や寺院の存在を示しているのかもしれない。他にも天武 7（679）年に起こった筑紫地震関連遺構の噴砂跡もある。これら 2 つの遺跡以外にも陣屋堂出遺跡では 9 世紀頃の土師器坏に「次成」と記された刻書土器 1 点が出土した。北大手木遺跡でも 9 世紀頃の内黒土器が出土する土坑や北野天満宮へ通じる道路状遺構も検出されている。なお、良積遺跡では、奈良から鎌倉時代にかけての大溝や方形遺構などの遺構もある。

鎌倉時代以降では大城中筒井遺跡で火葬土壙 10 基、大城小学校校庭遺跡や金島馬場遺跡で土坑や溝を検出した。現在、北野町内では目立った集落遺跡はないが、定格遺跡や仁王丸遺跡では中世の土師器や陶磁器、茶屋敷遺跡では 11～16 世紀の土師器・瓦質土器・染付碗などの遺物が出土する。なお最も新しい遺跡として、赤司城跡では城跡に関連する遺構は検出されなかったが、江戸時代末期～大正時代の甕棺墓 14 基を検出する。

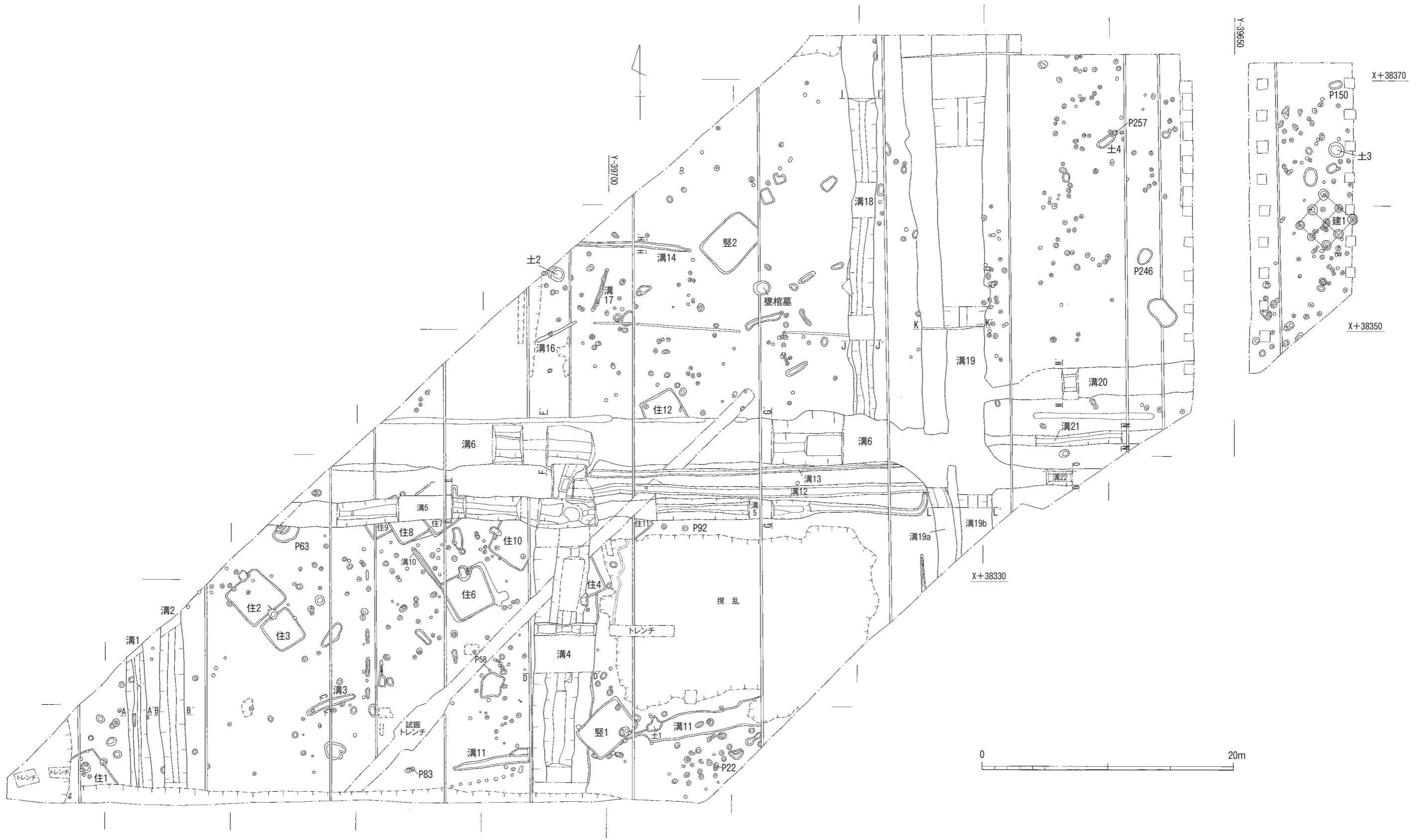
このように、久留米市北野町では良積遺跡・彼坪遺跡のような弥生時代の大規模な拠点集落や古賀ノ上遺跡といった奈良・平安時代の官衙遺跡もあり、今後の調査の進展によりさらに歴史が解明されるのではないと思われる。（※参考文献は P48 を参照。）



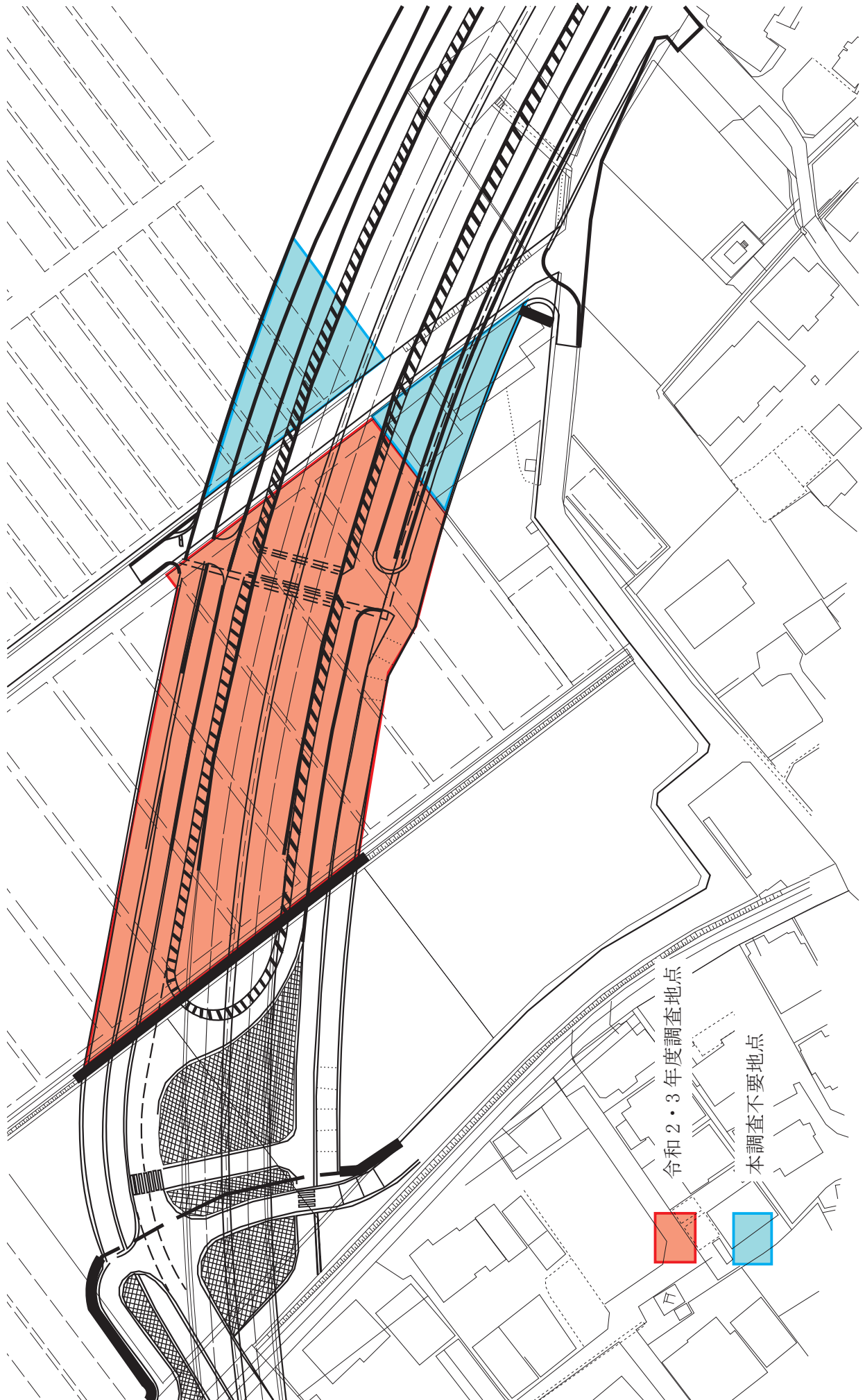
※国土地理院発行『鳥栖』一部改変

- | | | |
|------------|--------------|--------------|
| 1 十郎丸長谷古遺跡 | 8 陣屋堂出遺跡 | 15 仁王丸古墳 |
| 2 十郎丸遺跡 | 9 良積遺跡 | 16 仁王丸遺跡 |
| 3 古町遺跡 | 10 八勝負遺跡 | 17 今寺遺跡 |
| 4 彼坪遺跡 | 11 餅田遺跡 | 18 大城小学校校庭遺跡 |
| 5 北大手木遺跡 | 12 定格遺跡 | 19 大城中筒井遺跡 |
| 6 中厨子田遺跡 | 13 赤司一区公民館遺跡 | 20 金島馬場遺跡 |
| 7 茶屋屋敷遺跡 | 14 赤司城跡 | 21 稲数遺跡 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 十郎丸長谷古遺跡全体図 (1/300)



第4図 十郎丸長谷古遺跡詳細図 (1/1,000)

Ⅲ 十郎丸長谷古遺跡の調査

1 調査の概要

十郎丸長谷古遺跡の調査は、西日本鉄道甘木線の北側、十郎丸字野屋敷 1096・1097・1098 が調査対象地である。調査面積は 4,000㎡になる。調査地周辺は、圃場整備が行われた田畑となっている。調査地は、対象面積が広く一度に全面調査ができないため、大きく南北に分けて調査区を設定した。まず令和 2 年 11 月 9 日から調査区の南側をバックホーにより表土剥ぎを行い、調査を開始した。令和 3 年 1 月 20 日の空撮終了後、同月 25 日から南側の埋め戻しと北側の表土剥ぎを同時に行った。令和 3 年 3 月 5 日に再度空撮を行い、実測等が終了した箇所から埋め戻し、令和 3 年 3 月 22 日で南側の調査区の調査を終了した。引き続き令和 3 年 5 月 24 日から、北側の調査区 (800㎡) について調査を開始した。北東側にかけて弥生時代の遺構が確認されており、遺構密度が多くなると期待された。しかし表土剥ぎの結果、遺構はほとんど確認されず、令和 3 年 6 月 8 日の空撮、6 月 11 日に機材撤去をして調査を終了した。

各遺構は弥生時代の竪穴遺構 2 基、甕棺墓 1 基、土坑 3 基と奈良時代の竪穴住居跡 11 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 1 基、鎌倉時代の溝 1 条および江戸時代以降の溝 18 条とピット約 260 基を検出し、弥生土器・土師器・須恵器を中心にパンケース 60 箱が出土した。

2 弥生時代の遺構

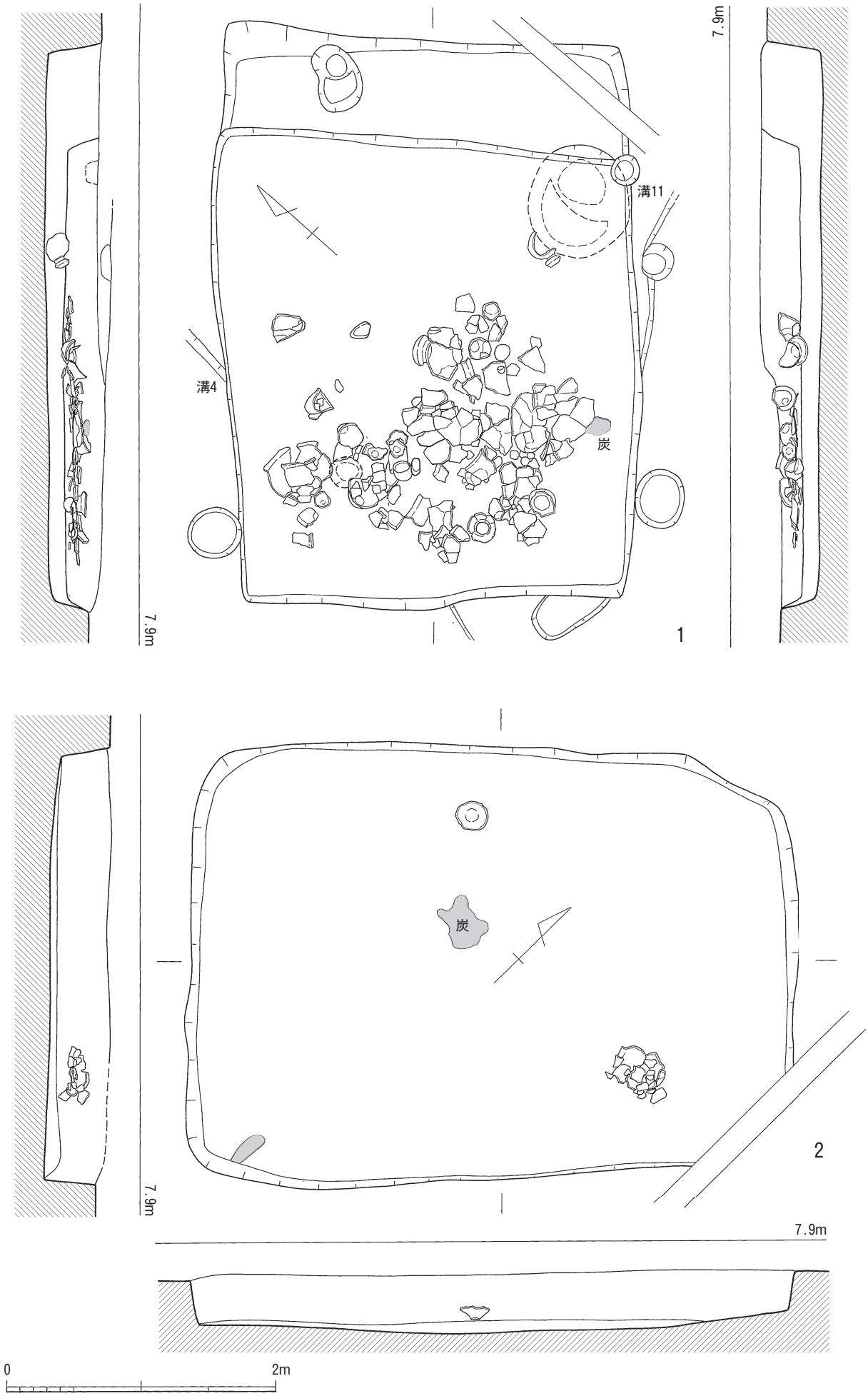
2-1 竪穴遺構 (第 5～11 図、図版 4・14・15・18)

竪穴遺構は調査区内で北側と南側に 2 基検出している。1 号竪穴遺構は当初、5 号竪穴住居跡として掘削していたが、炉跡や柱穴もないことから 1 号竪穴遺構と名称変更した。

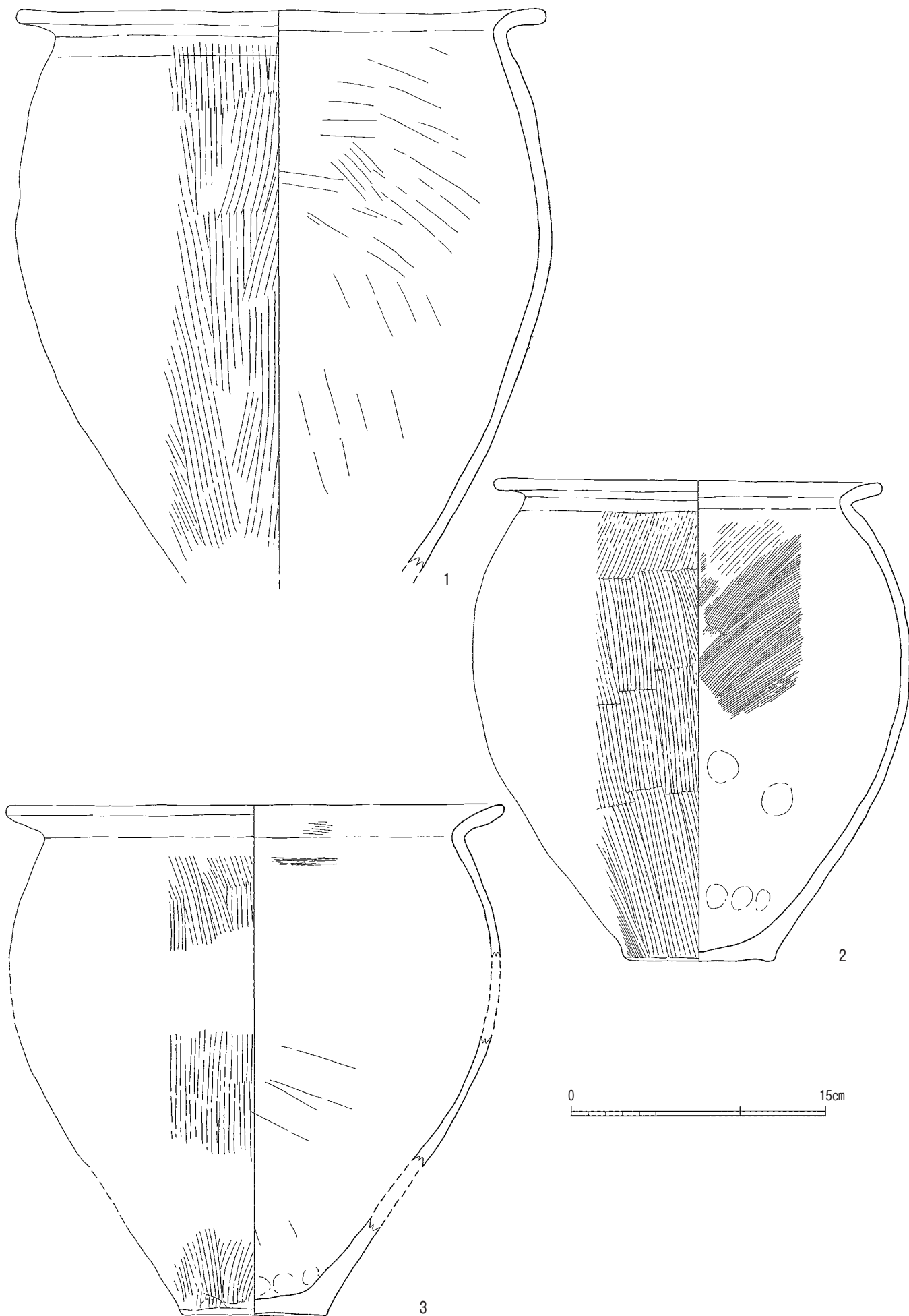
1 号竪穴遺構 (第 5～9 図、図版 4・14・15・18)

調査区南端付近に位置し、北東側と南西側にかけて暗渠や近代ピット、江戸時代の 4 号溝に攪乱されていた。形状はやや崩れた長形状で、土器が集中して出土した部分で長さ 3.6m × 3.15m を測る。遺構と地山との土色の識別に苦慮したため、土器が検出できる範囲として、北東側にさらに 0.8m × 3.15m 程拡張している。深さは上面から約 0.3m 程で、弥生土器が集中して出土していた。しかし、はっきりとした地山を確認できなかったため、さらに深さ 20cm ほど掘削して、土器が検出できなくなったこの位置を床面とした。弥生土器は、南西側に集中して、甕・複合口縁壺などを廃棄したような状況で出土した。掘削時には土器が多量に出土していて気づかなかったが、土器を復元した結果、中型棺のサイズの甕棺も出土した。検出状況からは甕棺としての掘り方も不明で、また甕棺として埋置したというよりは、他の土器と同様にその場に廃棄したような状況であった。

6～9 図 1～25 は弥生土器である。1～9 は甕である。1 のみ口縁部が水平になる逆 L 字状だが、他の口縁部はく字状である。底部は 2・3・7・8 のみ残存し、平底である。調整は内外面は刷毛目であるが、内面にケズリや板状工具によるナデを施しているものもある。10～13 は壺である。10～12 は複合口縁壺で、10 と 11 は口縁部が丸味をもち肉厚であるが、12 はやや角張った口縁で頸部上半に突帯をもつ。いずれも頸部は短い。調整は外面に刷毛目やナデ、内面にも刷毛目があるが、頸部は強いナデの痕跡が残る。12 の方がやや新しい型式になるか。13 は鋤形口縁をもつ壺である。



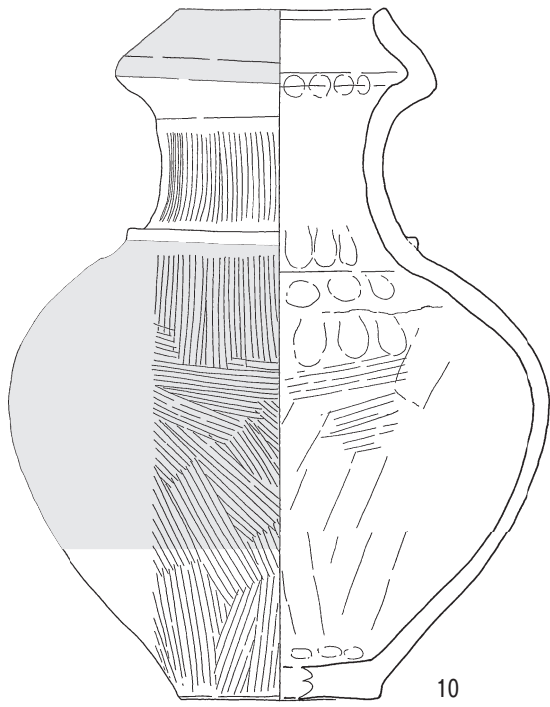
第5図 1・2号竖穴遺構実測図 (1/40)



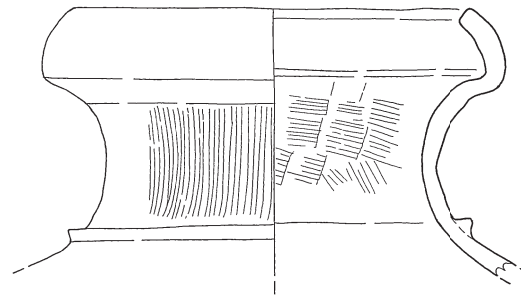
第6図 1号竖穴遺構出土遺物実測図1 (1/3)



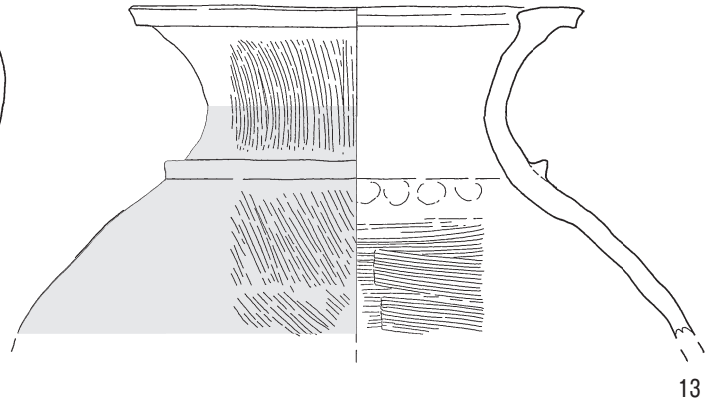
第7図 1号竪穴遺構出土遺物実測図2 (1/3)



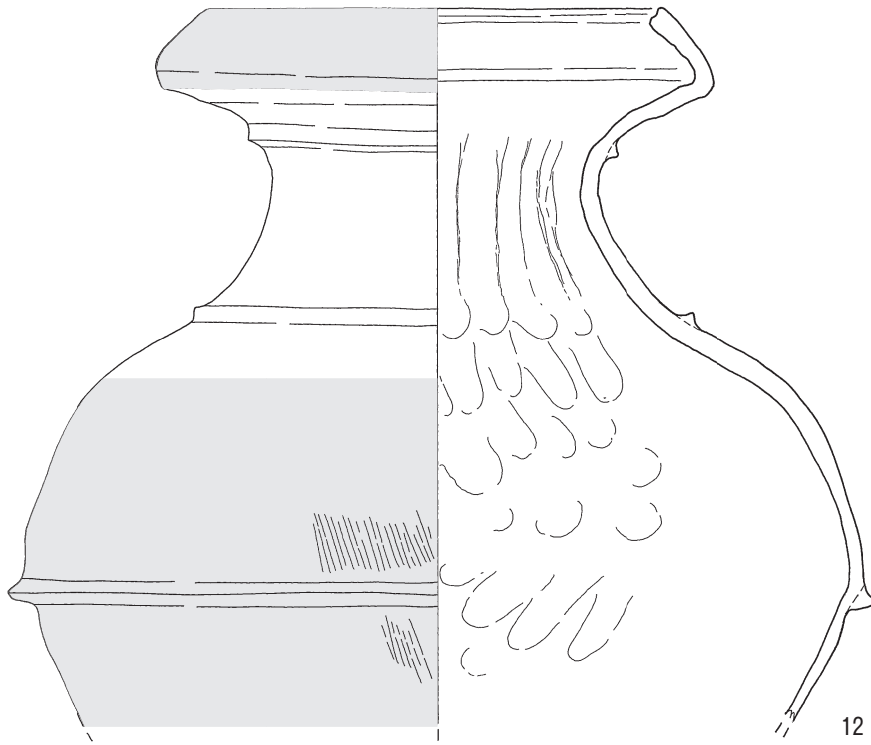
10



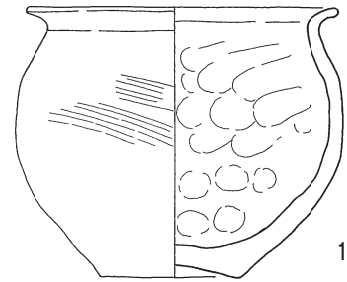
11



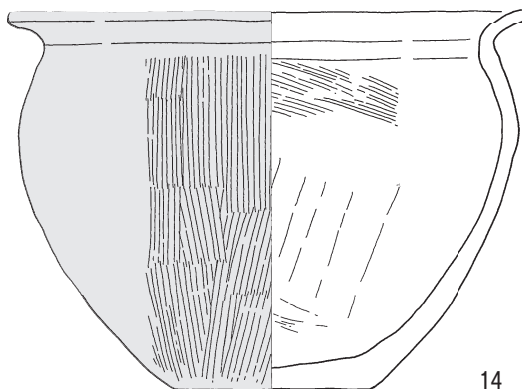
13



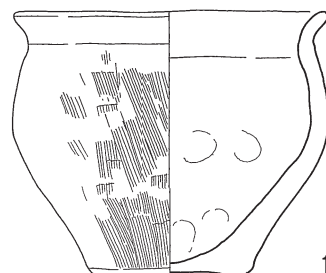
12



15

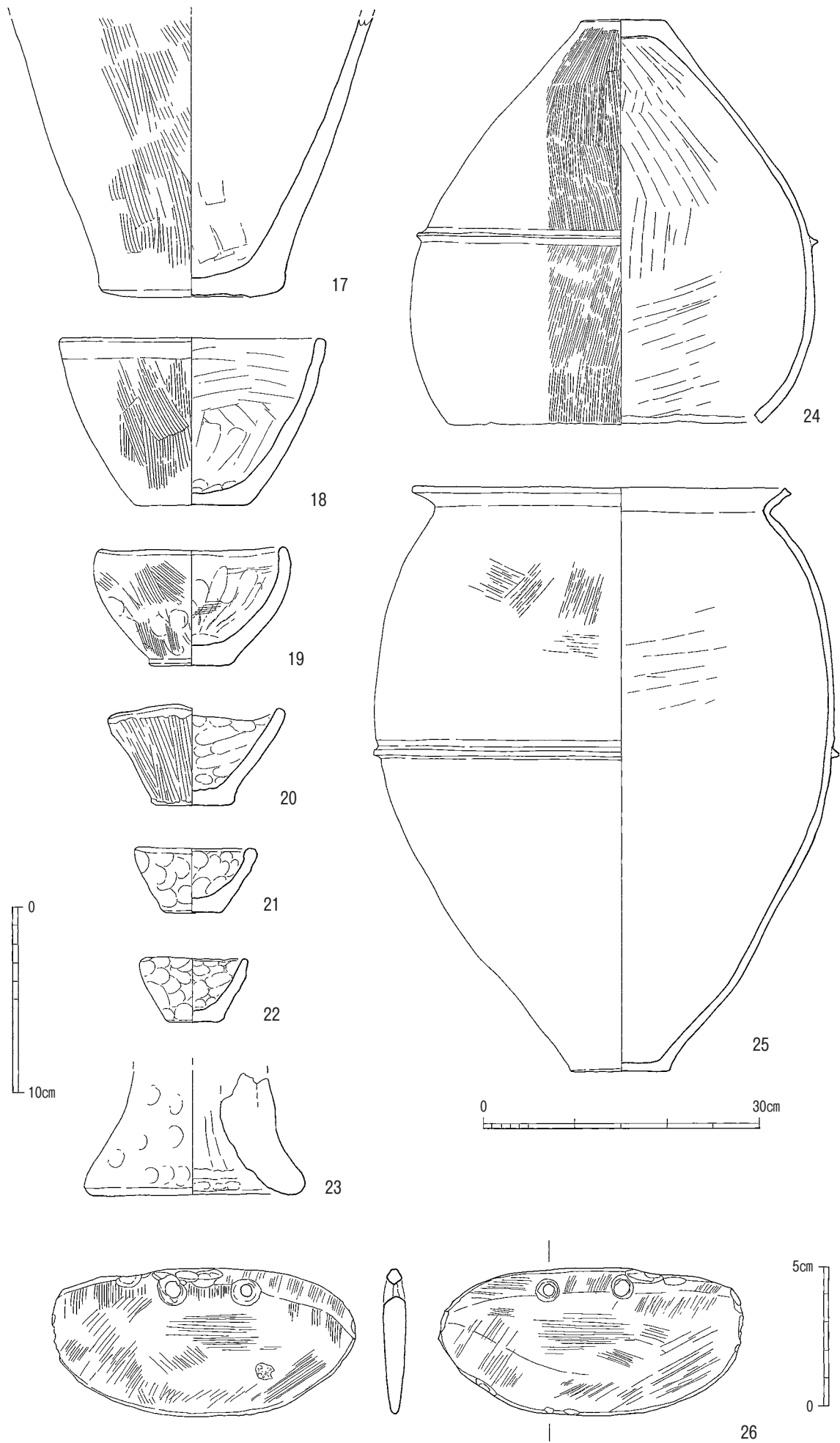


14



16

第8図 1号竖穴遺構出土遺物実測図3 (1/3)



第9図 1号竪穴遺構出土遺物実測図4 (26は1/2、24・25は1/6、他は1/3)

14～16は鉢である。14は復元口径20.4cm、15と16は復元口径12.4cm。17は底部から体部下半に向かって傾きがあるので、甕の底部片か。外面に刷毛目、内面には工具によるナデを施す。18と19は小型の鉢である。19の体部が緩やかに曲線状になり、口縁端部で内側に傾く。復元口径14.4cm・10.4cm。20～22は手づくね土器である。いずれも内外面に指頭圧痕が明瞭に残る粗い作りで、20の口縁部は波打つ。20と22は完形品で口径9.5cm・5.8cm、21は復元口径6.6cm。23は器台の脚部片か。内外面はナデの痕跡が明瞭に残る。24と25は甕棺である。24の口頸部は打ち欠いて上甕として使用か。25は下甕として使用したものか。口頸部はく字状で、体部は24と同様で卵形になり、最大径となる体部中位のやや下に突帯が付く。調整は摩滅しているが、外面に刷毛目、内面に板状工具によるナデが僅かに残る。橋口達也編年によるKⅣa式に相当するものか。26は石庖丁である。上部には両面から削った2ヶ所の穿孔がある。2mm程の刃部が両面に僅かに付く。長さ11.0cm、幅5.35cm、厚さ0.8cm、重さ68.4g、輝緑凝灰岩製。

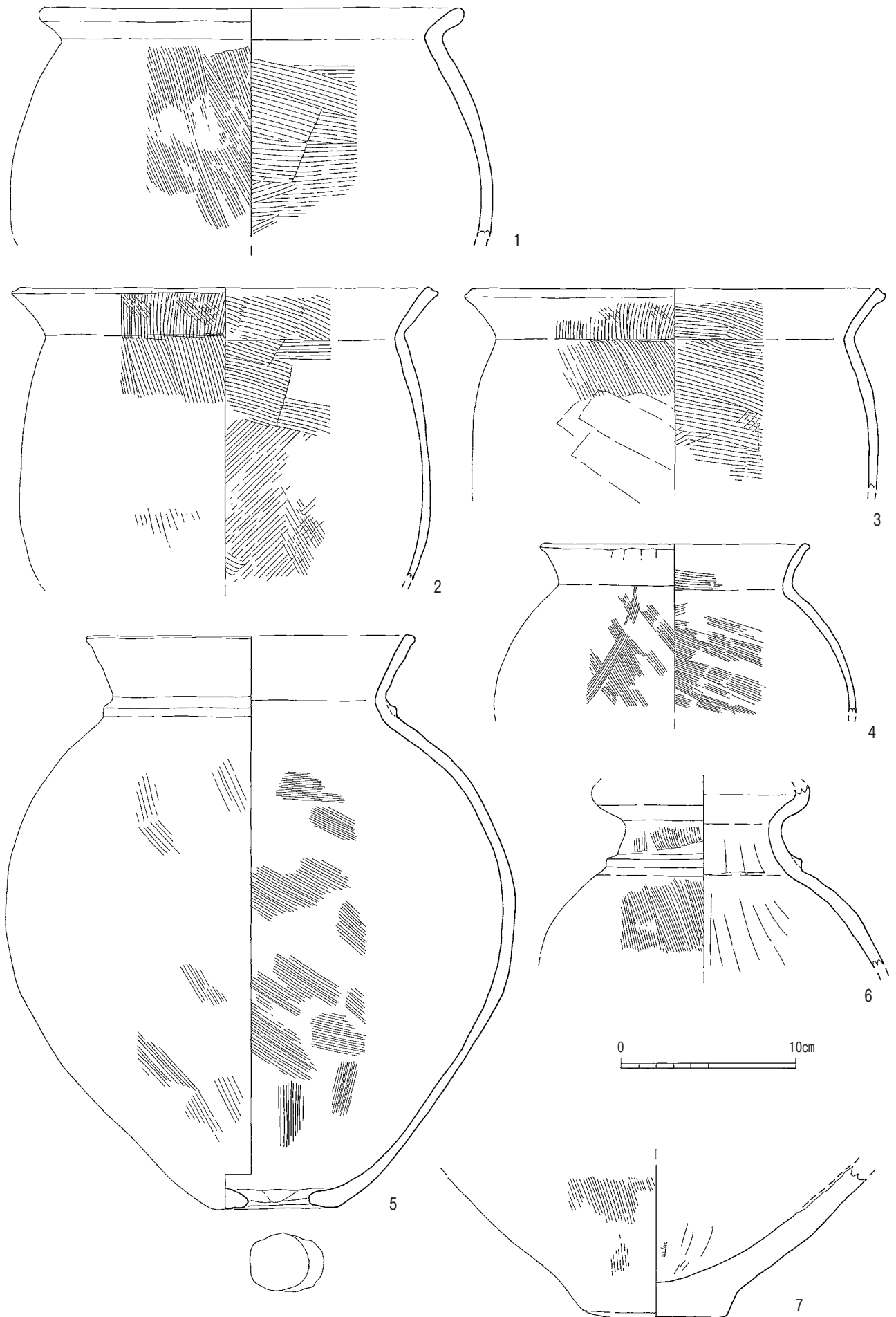
2号竪穴遺構（第5・10・11図、図版4・15）

調査区北西側に位置し、北東隅を暗渠で攪乱を受けていた。弥生土器の破片が集中する部分の暗褐色土を掘削し竪穴遺構とした。これも1号同様に、遺構と地山との土色の判別に苦慮したため、土器が出土する範囲（長さ4.6m×3.3m）で、形状は隅丸長方形になる。甕や壺を検出した深さ0.45m付近を床面とした。小片が多く出土したが、図化に耐えうるもののみ掲載した。ここも1号同様に土器を廃棄したような状態で検出した。なお、底面の中央および南隅にて、炭化物片を検出した。

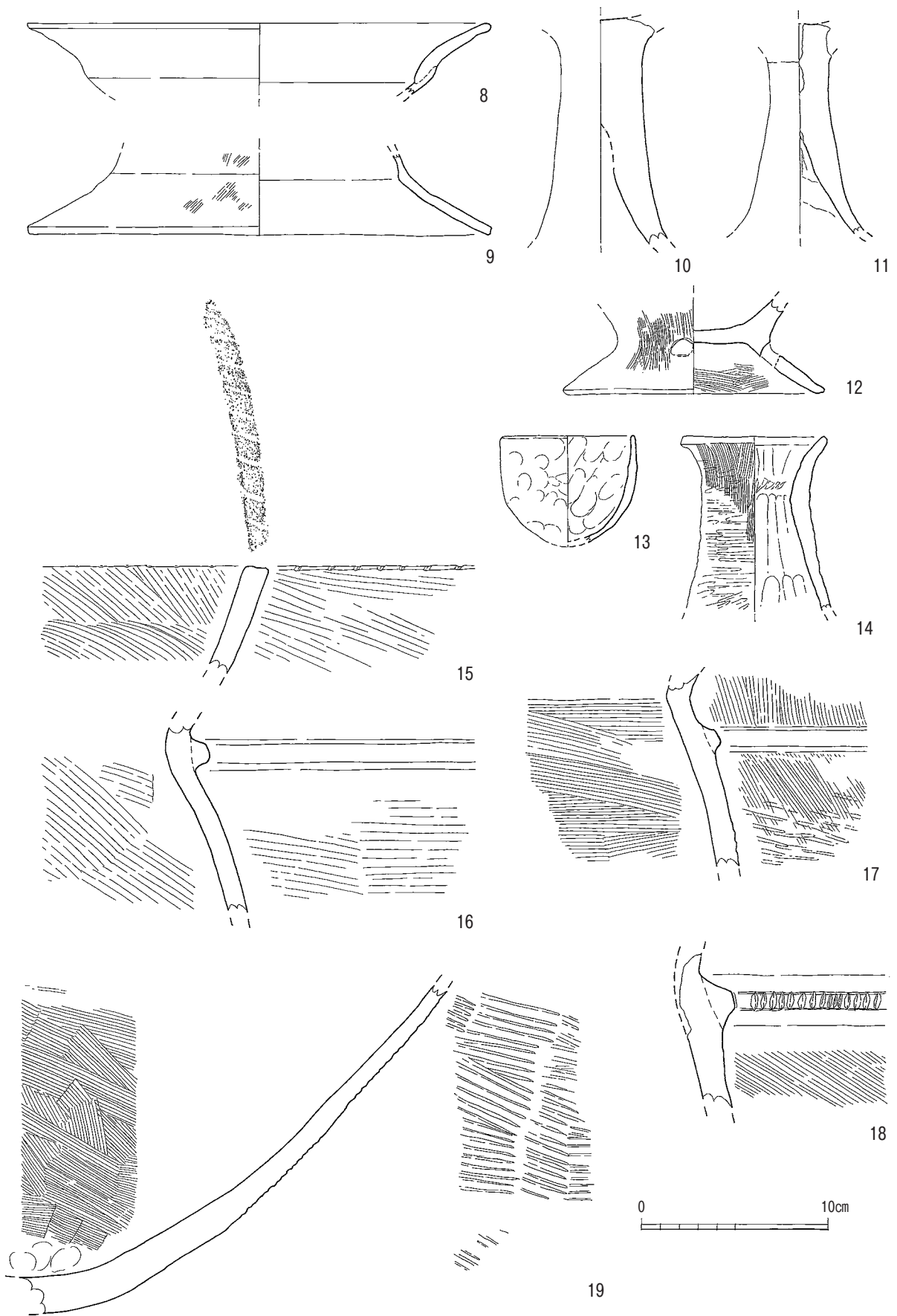
10・11図1～19は弥生土器である。1～4は口頸部がく字状になる甕である。器形は1のみやや口頸部が短く傾きが浅い。また4は1～3と比べて頸部が窄まるので、壺に近いか。復元口径24.4cm・24.4cm・24.0cm・15.4cm。5は壺で口頸部が窄まり、体部は球状になる。底部中央には外側から径3.0cm～3.5cmの円形の穿孔を施す。復元口径18.8cm。6は複合口縁壺の頸部片で、頸部の高さは2.0cm程と短い。7は外側に大きく開いていることから壺の底部片で、平底である。8～11は高坏である。8は坏部で、口縁部は内湾して外へ開く。復元口径24.8cm。9は脚部片で、内面の段から端部に向かって大きく外に開く。10と11は脚部片で、11のみ内面にシボリの痕跡が見える。12は台付鉢片、脚部に円形の穿孔が1ヶ所ある。内外面は刷毛目である。13は手づくね土器の鉢片である。器壁が3mm以下と薄く作られる。内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。14は器台で、脚端部は欠損する。15～19は甕棺片である。15は口縁部片で、端部の上面に刻目を入れる。16と17は頸部片、18は体部片か。断面四角形の突帯が付く。18のみ突帯に刻目を入れる。19は底部片で、橋口編年KⅤ期の甕で、形状から丸底か。調整は内外面に刷毛目で、19のみ外面に粗いタタキを施す。

2-2 甕棺墓（第12・13図、図版5・15）

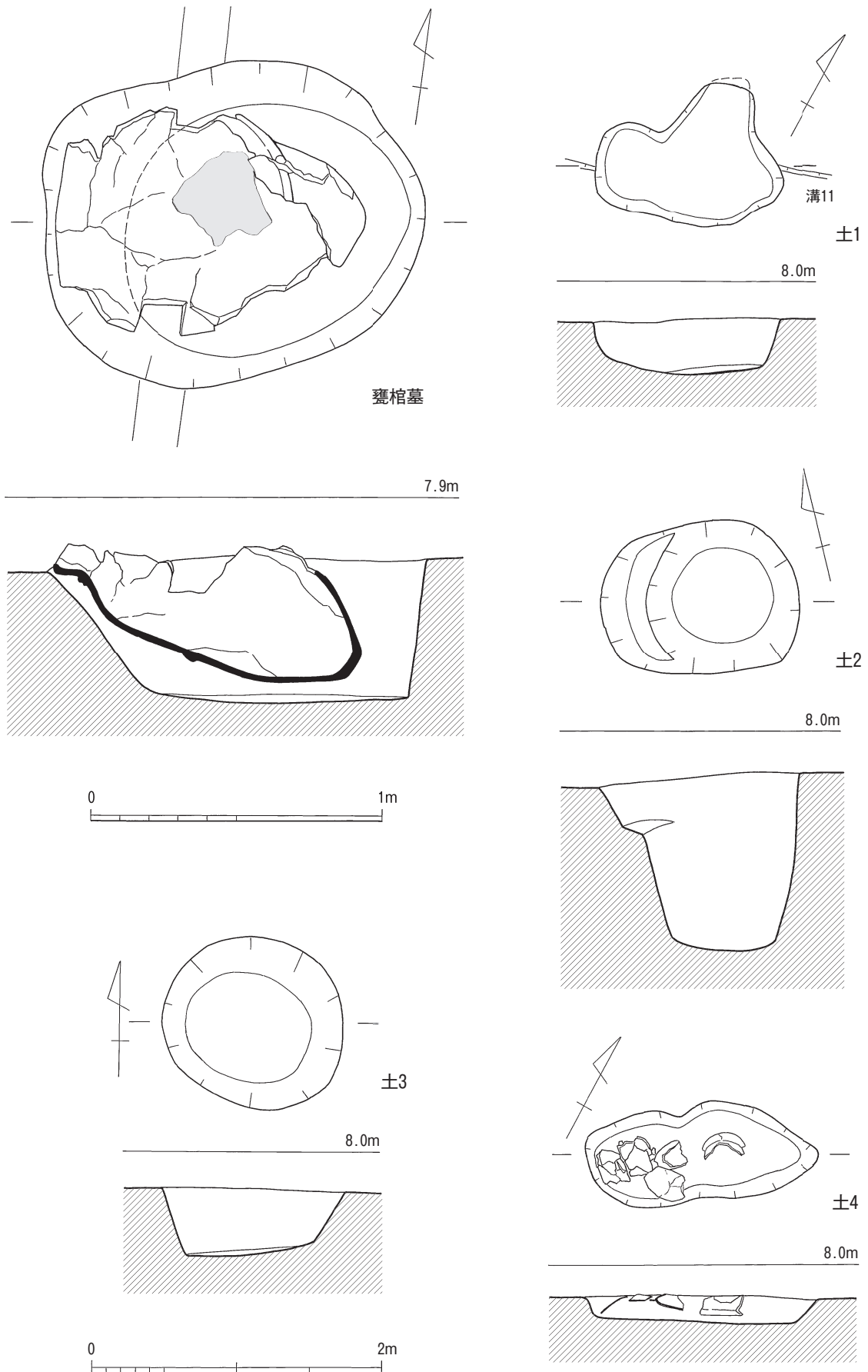
甕棺墓は調査区中央やや北よりで、1基のみ検出した。甕棺墓の中央は圃場整備時に埋設した暗渠により、上部は破壊されていたため、上甕などはなく下甕が1/2以下のみ残存していた。掘り方は西向きにやや崩れた隅丸長方形を呈し、長さ1.3m×1.1mを測る。深さは0.5mを測り、甕棺は30度の角度で設置され、土砂で内部は充満されていた。甕棺内部の土砂はふるいにかけてが、



第10図 2号竪穴遺構出土土器実測図1 (1/3)



第11図 2号竖穴遺構出土土器実測図2 (1/3)



第12図 甕棺墓および土坑実測図 (1/20、1/40)



口縁及び突帯



赤色顔料

第13図 甕棺実測図 (1/6)

出土遺物は検出できなかった。

13 図 1 は橋口編年で弥生時代後期後半頃とされている K V d 期の甕棺である。口縁部は大きく口を開き、端部は肥厚する。頸部には突帯が 1 条付き、そこで窄まる。胴部は卵形で胴部下半に突帯が付く。底部は丸底になるが、僅かに稜線が残る。口縁と頸部の突帯には刷毛目工具等による小口痕の刻目が入る。口縁には鋸歯文状に巡るが、突帯には格子目状に細かく刻目が入る。胴部下半の突帯はナデ調整で刻目は入らないが、僅かにタタキ痕が残る。甕棺の調整は外面にまずタタキを施し、その後刷毛目で消しているが、所々に深いタタキ痕が残る。内面も外面と同様の刷毛目（1cm あたり 4～5 本程度）のみで、底部のみ指押さえの痕跡が僅かに残る。なお、赤色顔料が甕棺内部の胴部上半～底部にかけて塗布されている。復元口径 80.9cm、器高 98.7cm。

2-3 土坑（第 12・14～16 図、図版 5）

土坑は 4 基検出したが、そのうち弥生時代の遺構は 3 基検出した。残り 1 基については後述する。

1 号土坑（第 12・14 図、図版 5・16）

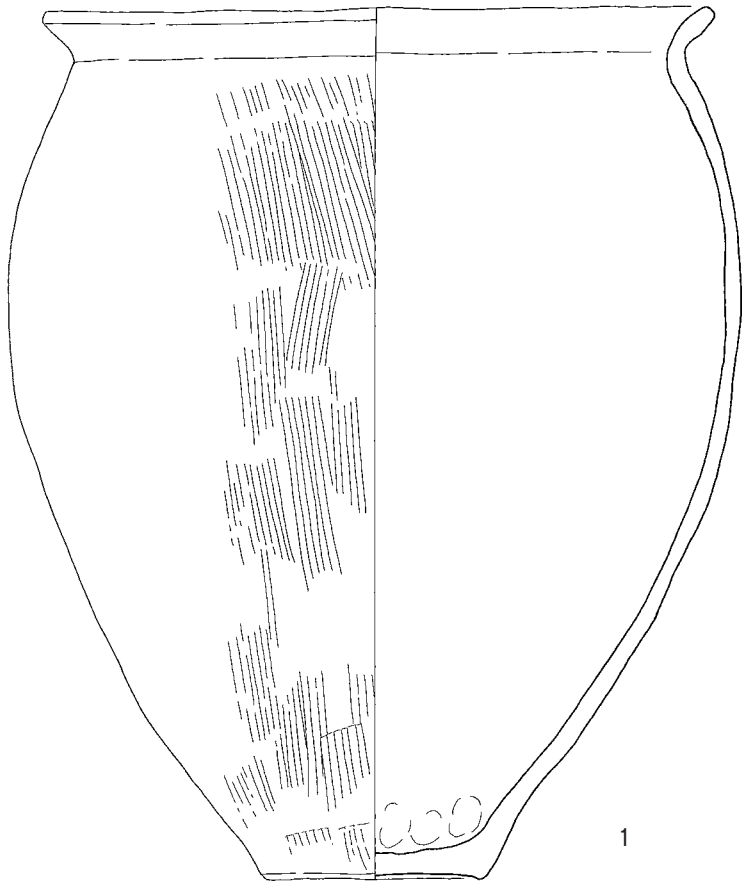
1 号土坑は 1 号堅穴遺構の東側に位置する。2 つの穴が重なり合うような形状で、土器がまとまって出土したことから土坑と判断した。本来は 2 つ以上のピットの可能性がある。長さ 1.3m × 1.0m、深さ 0.35m を測る。北側の底面は少しオーバーハングする。

14 図 1～4 は弥生土器の甕で、頸部はく字状になる。体部上半で最大径となり、底部に向かって窄まっていく。いずれも調整は外面に刷毛目、内面は摩滅するが刷毛目やナデを施す。1 と 4 は底部が平底になる。1 のみ 8 割以上残存する完存品である。復元口径 26.7cm・24.4cm・25.4cm・15.2cm。5 は弥生土器の器台脚部片である。端部に向かって薄手になる。外面に粗いタタキが明瞭に残るが、内面はナデである。

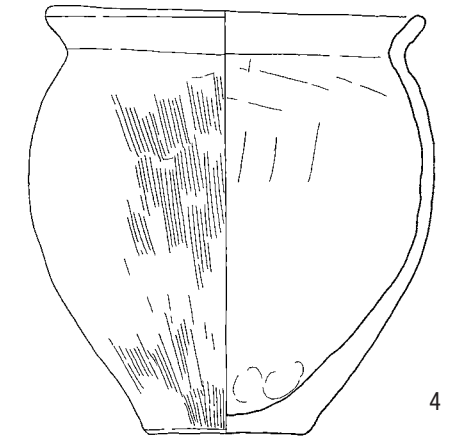
3 号土坑（第 12・15 図、図版 5・16）

調査区北東隅に位置する。形状は円形で、径 1.2m～1.25m を測る。断面は逆台形状を呈し、深さ 0.45m を測る。埋土は暗褐色土で、周辺の遺構より大きく、土器も多く出土したことから土坑とした。

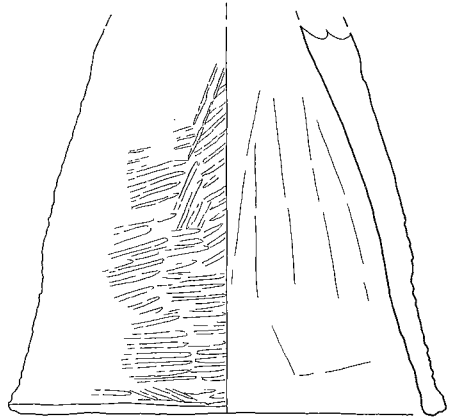
15 図 1～10 は弥生土器である。1 は甕又は壺底部片で、丸底である。2 は複合口縁壺片で、頸部は短い。3 は甕の体部片か。突帯は断面方形状である。1～3 の内外面は刷毛目である。4 は台付甕又は鉢の底部片である。外面は板状工具によるナデと僅かに刷毛目が残る。5 は外側に口縁部が張ることから、皿片か。薄手で丁寧に作られていて、内外面は刷毛目で内面に縦方向のミガキを施す。復元口径 28.0cm。6～8 は器台である。6 と 7 は同一個体で、外面に刷毛目、内面には工具痕やナデを施す。8 は脚端部を欠損する。外面は粗いタタキの後に刷毛目を施す。内面は頸部に刷毛目が僅かに残るが、頸部以下はナデである。復元口径 14.0cm・15.0cm。9 と 10 は支脚で、底部は断面方形状で端部は外へ伸びる。器形は先端部に向かって湾曲して徐々に細まり、端部は尖らない。炉で使用されたため、2 次被熱を受け、赤変している。10 は別個体の底部片である。10 は 9 とは接合しなかったため少なくとも 2 個体はあったと思われる。



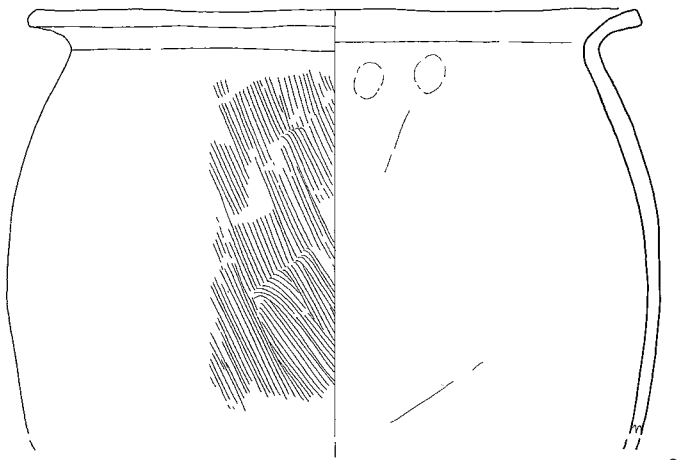
1



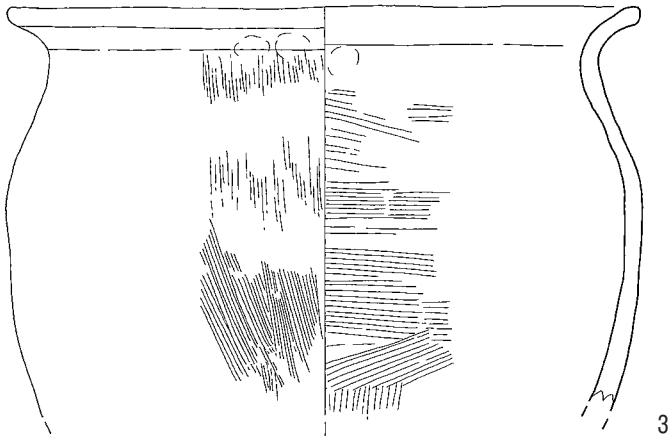
4



5



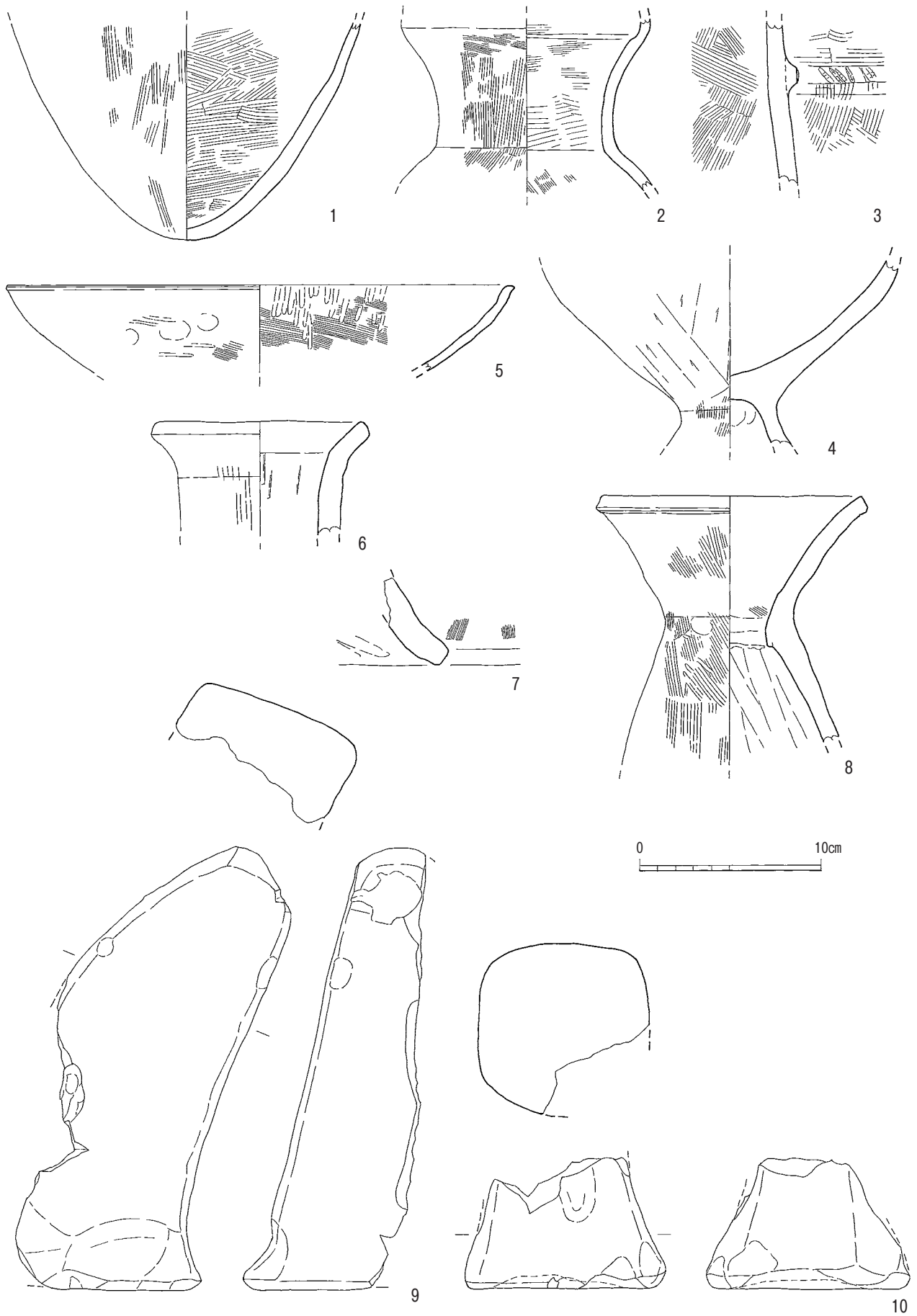
2



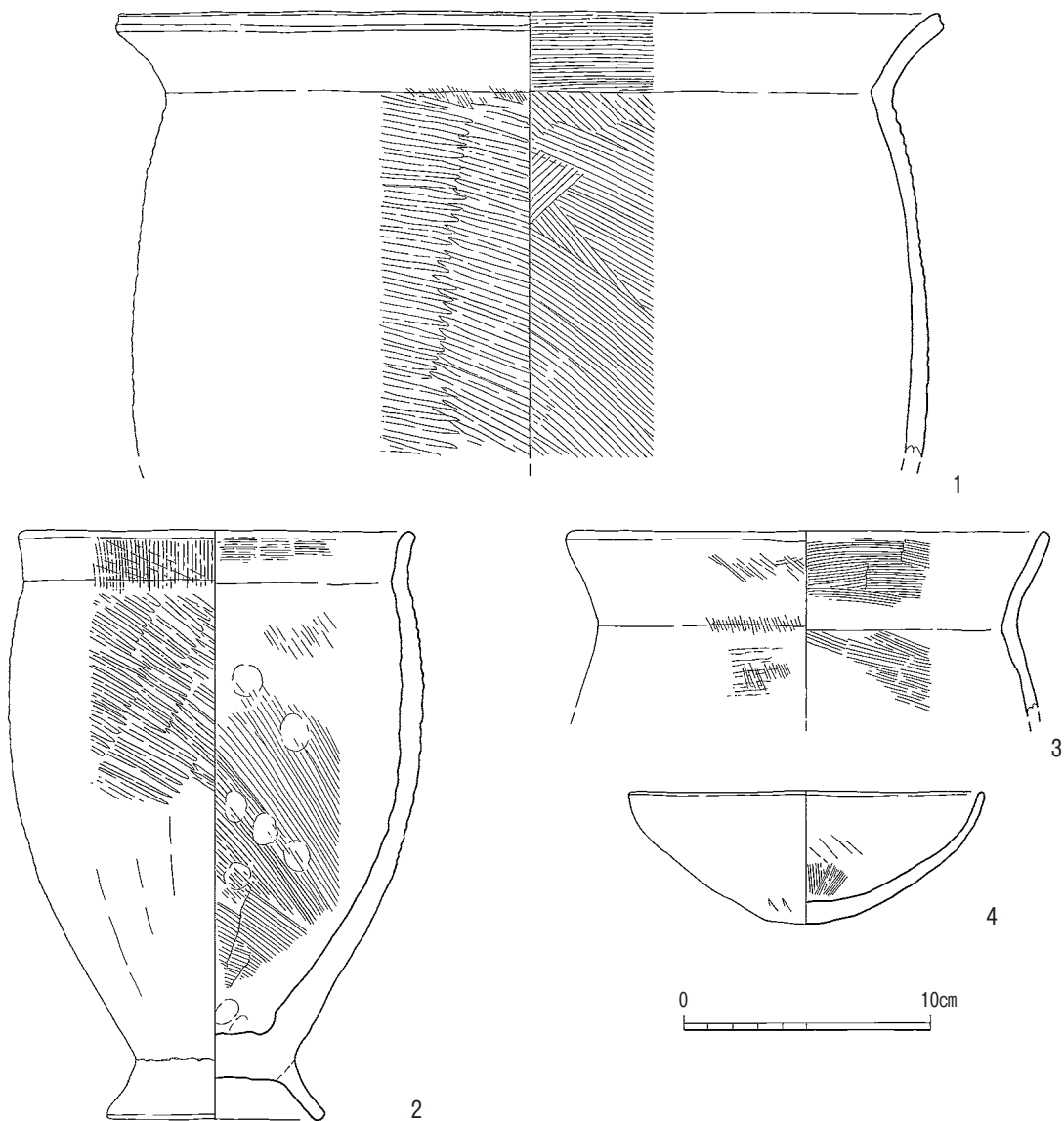
3



第14图 1号土坑出土土器实测图(1/3)



第15图 3号土坑出土土器实测图(1/3)

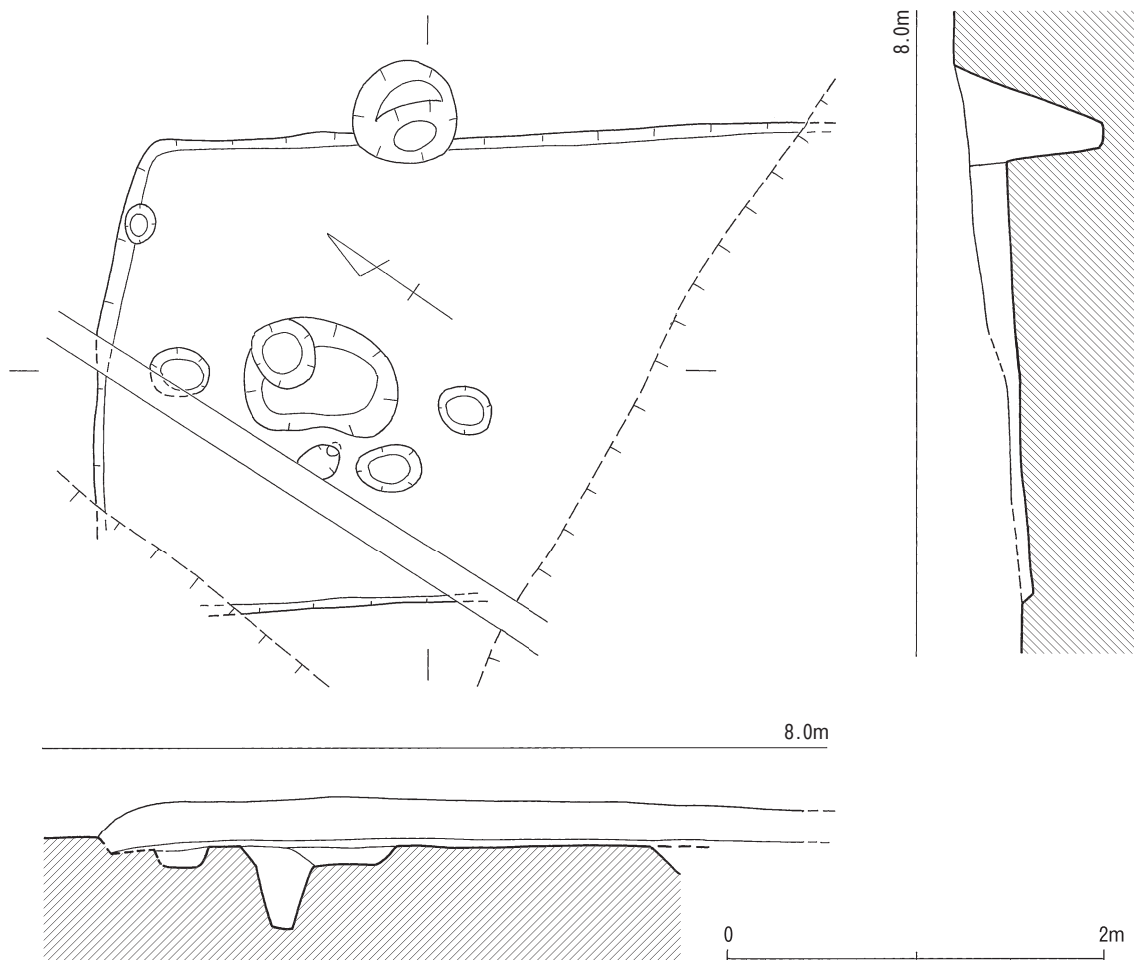


第16図 4号土坑出土土器実測図(1/3)

4号土坑(第12・16図、図版16)

3号土坑の西側に位置し、弥生土器を多く検出したので土坑とした。形状はピットが二つ重なったような状態で検出した。長さ1.6m、幅0.65m、深さ0.2mを測る。

16図1～4は弥生土器である。1は甕片で、口縁端部に向かって大きく外に開く。口頸部は厚いが、体部は薄く作られる。外面の口縁部はナデ、体部はタタキ、内面は刷毛目を施す。復元口径33.6cm。2は台付甕である。口頸部は僅かに屈曲するが、直に立つ。体部～底部は厚く、しっかりと作られている。内外面は刷毛目で、外面体部上半はタタキ、体部下半は板状工具でナデ消す。口頸部を一部欠損するが、完存品である。3は甕片で、口頸部はく字状になる。内外面は刷毛目である。復元口径19.6cm。4は丸底の鉢で、底部は他の部位より厚手である。全体的に摩滅しているが、内面の底部に刷毛目が残る。復元口径14.4cm。



第17図 1号竪穴住居跡実測図(1/40)

3 奈良時代以降の遺構

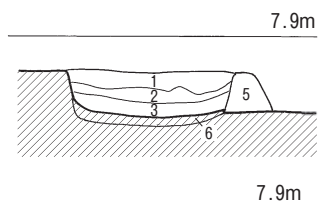
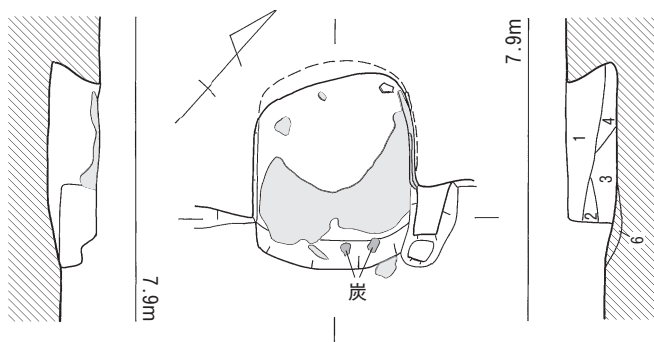
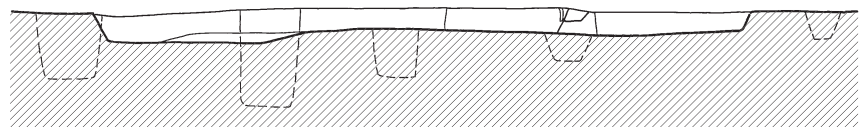
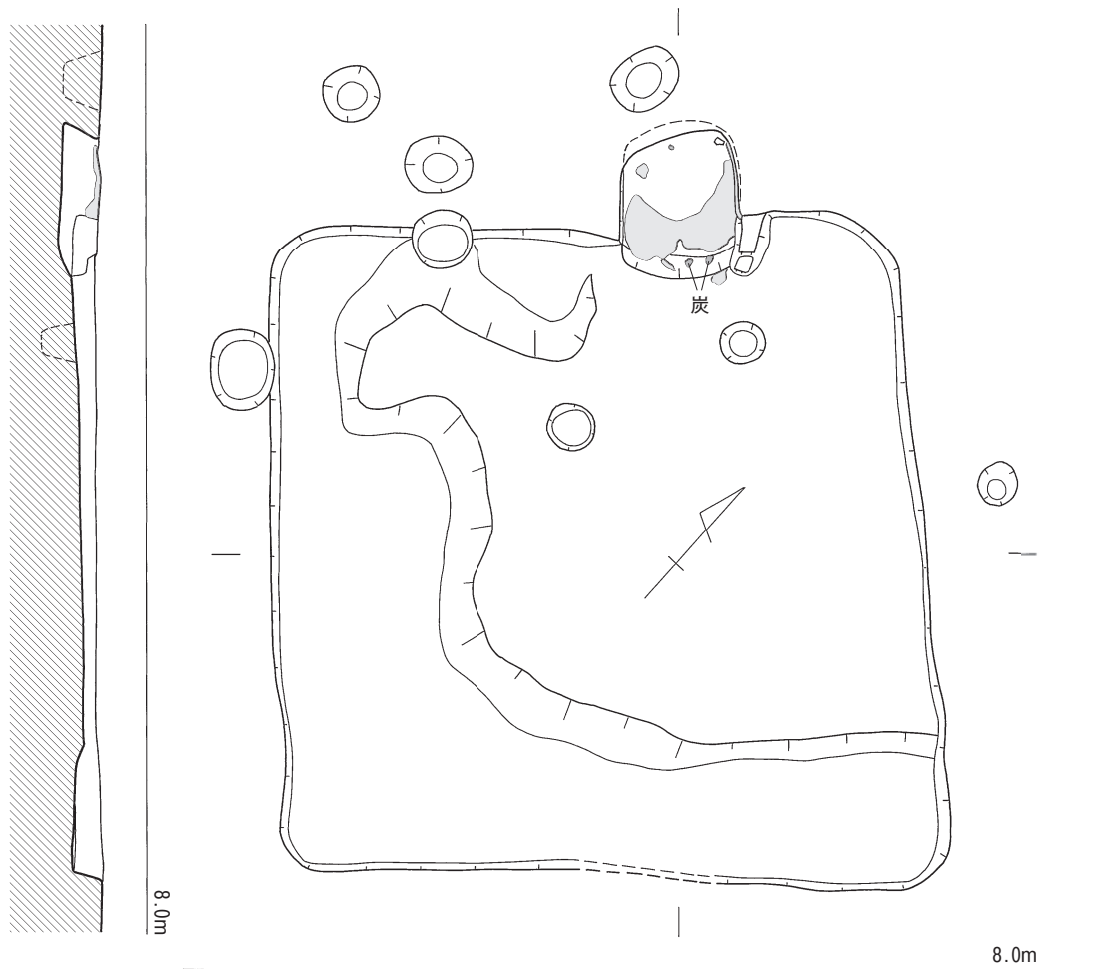
3-1 竪穴住居跡(第17~26図、図版6~9・16~18)

住居跡は11軒検出している。1号竪穴遺構は当初、5号竪穴住居跡としていたため名称変更により欠番になる。

1号竪穴住居跡(第17・20図、図版16)

調査区南西隅に位置する。遺構検出の際に長方形の痕跡を確認できたので、住居跡と判断した。東側の中央には深さ0.8mのピットに切られ、また西側隅や南側の1/3は圃場整備以前の水路跡などに削られ欠失している。遺構は長さ3.65m×2.5m、深さは0.1m~0.2mを測り、遺構の残存状況はあまり良くない。底面中央北寄りで複数のピットや浅い凹みを検出しているが、住居の柱穴とは考えにくい。遺構の時期は出土遺物から8世紀前半頃と判断した。

20図1・2は須恵器の坏蓋口縁部片で、口縁端部は嘴状になる。復元口径14.8cm・16.0cm。3は土師器の坏で、底部から口縁に向かって湾曲する。内面調整はナデである。復元口径16.0cm。4は土師器の甕口縁~頸部片で、口縁端部が外側に向かって開く。外面の調整は摩滅するが、内面は口縁部でナデ、頸部以下はケズリを施す。復元口径19.0cm。



- 1 褐色土
- 2 1に橙色土ブロックが混ざる (炭を多く含む)
- 3 1に灰色土が混ざる
- 4 1に橙色土が少量混ざる
- 5 褐色土が固く締まる (カマド袖)
- 6 橙褐色土 (地山)

第18図 2号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/30)

2号竪穴住居跡（第18・20図、図版6・7）

1号竪穴住居跡北東側に位置し、3号竪穴住居跡に南東側壁面中央を切られる。形状は、方形で1辺の長さ3.5m前後、深さ0.15mを測る。住居の掘り方内には、支柱穴となるようなものは検出されなかったが、北・東の西壁の内外で柱穴（径0.4m以下）が複数検出された。これらの柱穴を使用して、柱が建っていたと思われる。住居跡の埋土は褐色土で、地山の橙褐色土との識別が困難であった。床面は中央からカマド側にかけて、0.1m程一段高くなっており、西から南にかけて貼床を施していたのかもしれない。

カマドは北西側の壁面のやや北よりで検出した突出型カマドであった。カマドの袖は長さ0.3m、幅0.2m以下、高さ0.15mの右袖（褐色土）が被熱により硬化していた。カマドは奥行0.8m、幅0.65m、深さ0.2mを測る。カマドの断面はカマド前面から緩やかに中央へ向かって下がり、煙道側の底面が少しオーバーハンクしている。底面には被熱の痕跡があり、前面から右側壁上部にかけて赤褐色に変化していた。土層は褐色土内に含まれる炉壁片などの橙色土ブロック（中層）、炭（下層）により分層した。なお出土土器から時期は8世紀前半頃か。

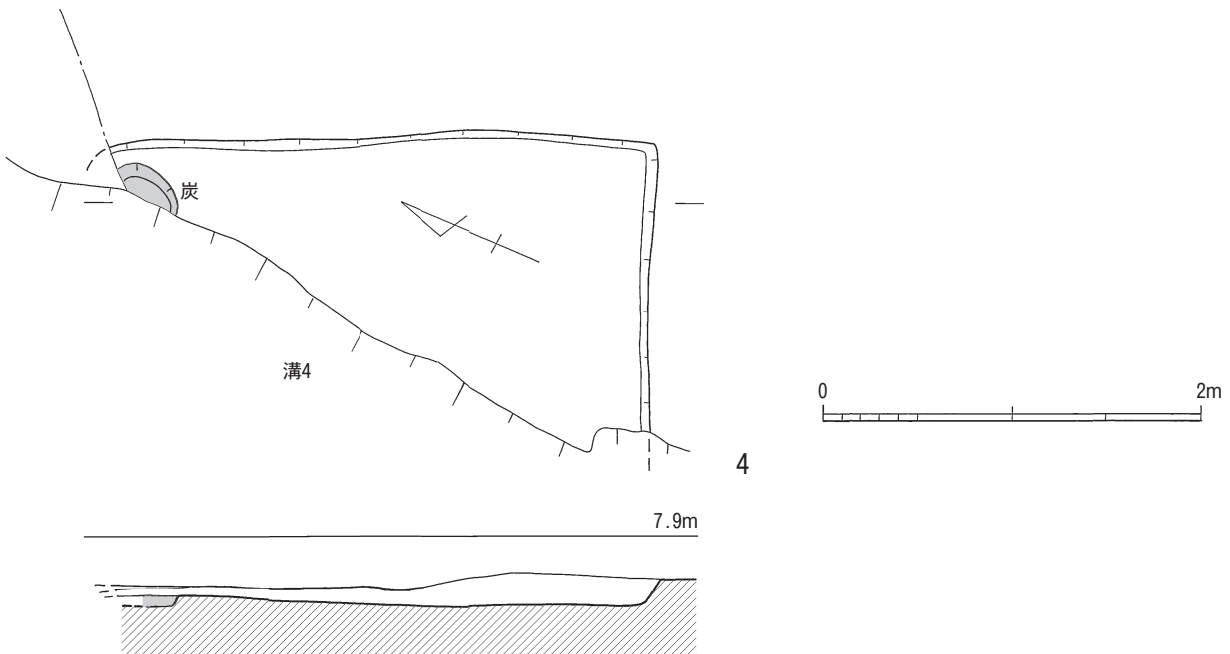
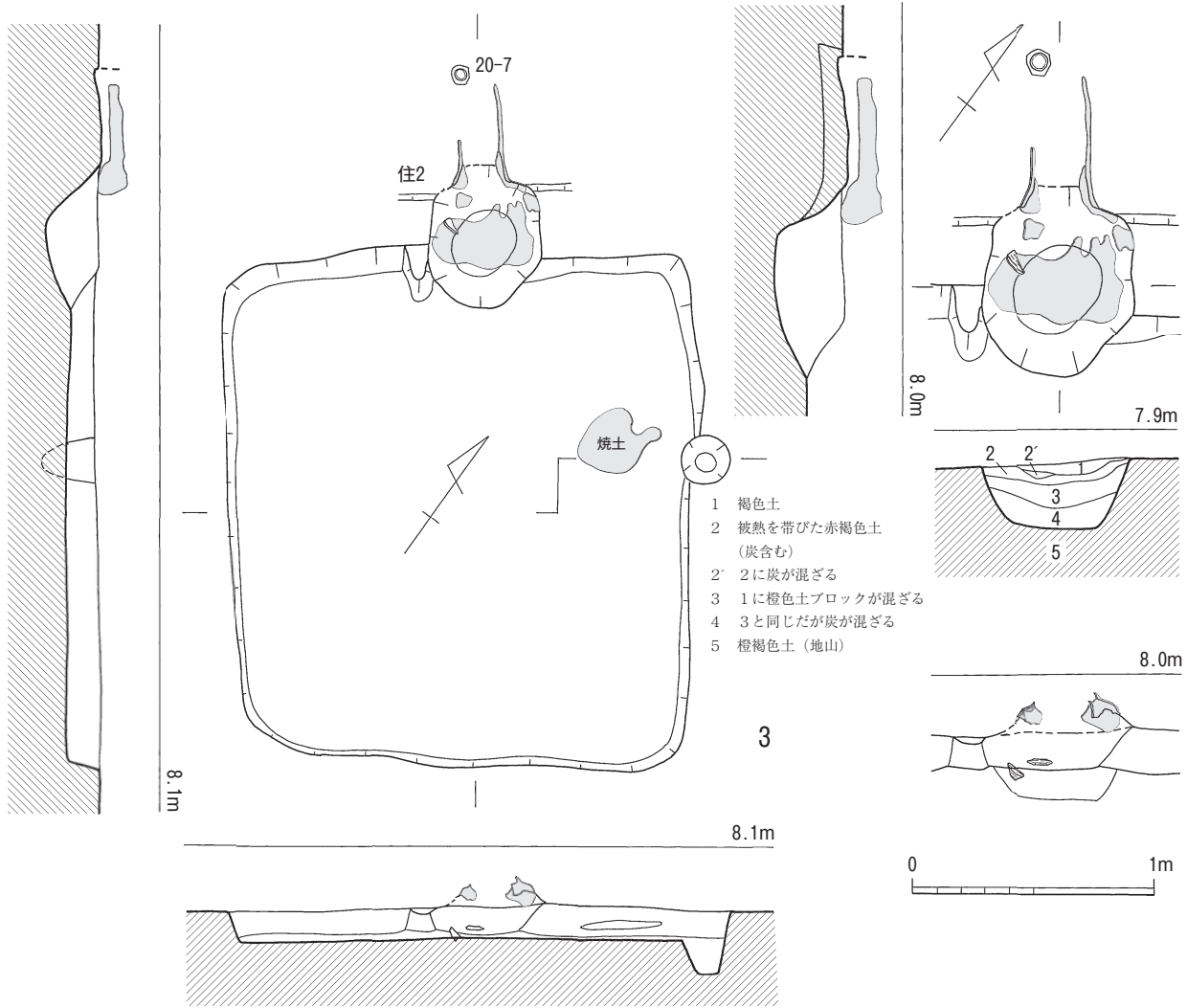
20図5・6は須恵器の坏蓋口縁部片で、6のみ端部がやや角張る。7は須恵器の高台付坏片である。高台の端部は方形状で、高台径9.3cmを測る。8は土師器の小型坏である。内外面はナデで、外面底部のみケズリを施す。復元口径10.0cm。

3号竪穴住居跡（第19・20図、図版6）

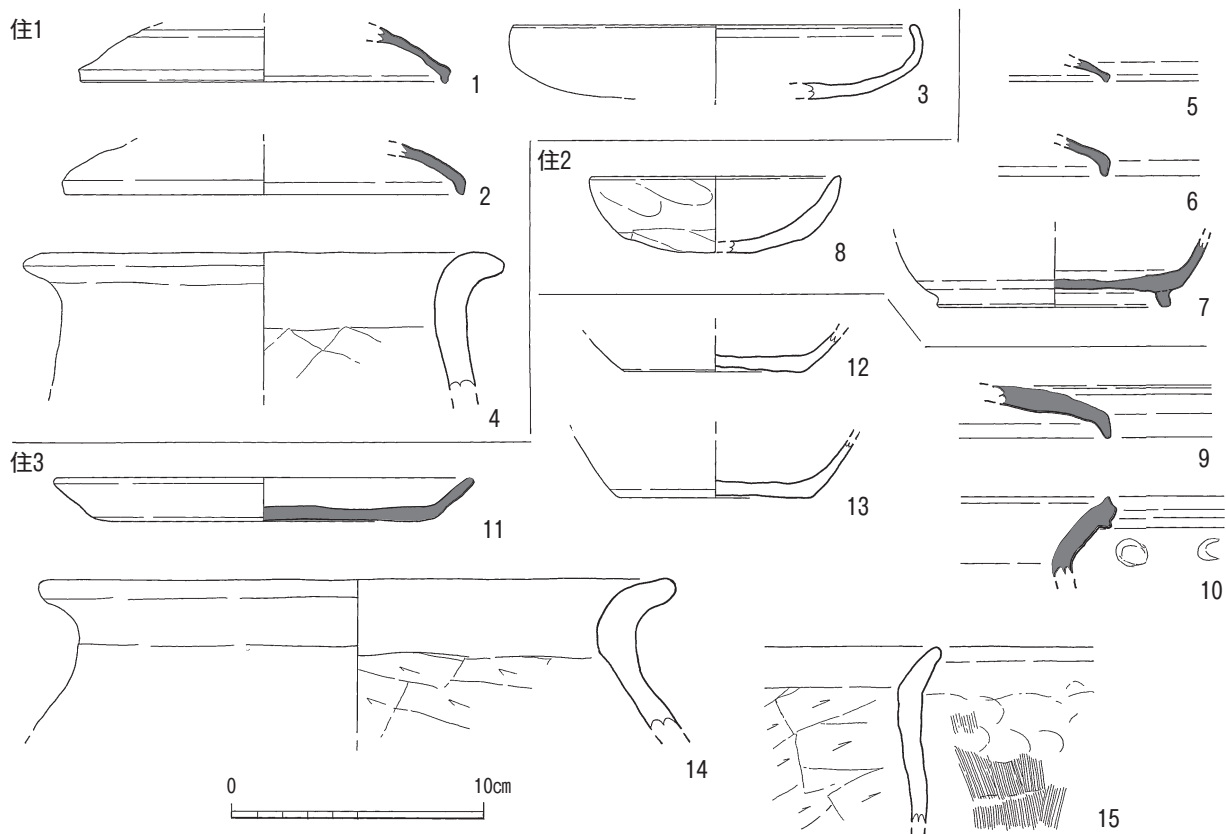
2号竪穴住居跡の南側に位置し、唯一カマドの煙道部が残存していた住居である。掘り方は南北方向が僅かに長い、ほぼ方形で長さ2.8m×2.6m、深さ0.2mを測る。床面から支柱穴となる柱穴は検出されなかったが、東壁面中央付近で焼土と径0.25mのピットを検出した。この穴が住居を建てる上で関連するのかもしれない。住居跡の埋土は2号竪穴住居跡と同様な褐色土であるが、地山である橙褐色土との識別が困難であった。

カマドは2号竪穴住居跡と同様に突出型のタイプになる。北側壁面中央に設置し、僅かではあるが左袖のみ残る。カマドの左袖は、長さ0.3m、幅0.15m、高さ0.15mを測り、褐色土が被熱により硬化していた。カマド内部は崩れた隅丸方形状で、0.7m×0.6m、深さ0.15m～0.3m以下を測る。カマドの断面はカマド前面から緩やかに中央に向かって下がり、煙道に向かって急激に立ち上がっていく。カマド底面と煙道底面では0.3m程高低差がある。カマド内の土層は、褐色土に炭や橙色土ブロックの含まれる量で大きく3層に分けられる。煙道部分は粘土で構築され、橙色土に硬化していたものが0.15m以下残存する。長さ0.55m、幅0.25m、深さ0.15mを測る。煙道口付近には須恵器坏の高台片が高台の脚部を上に向けて置かれていた。出土位置から煙道口を閉じるために使用されたのではないかとと思われる。なお、出土土器から時期は8世紀前半から中頃か。

20図9は須恵器の坏蓋片である。10は須恵器の甕口縁部片である。11は須恵器の坏で、口縁端部に向かって外へ開く。器高は1.7cmと皿に近い形状である。12～15は土師器である。12・13は坏の底部片である。14は甕の口頸部片で、頸部で窄まり、口縁に向かって大きく口を開く。調整は内外面ともに摩滅するが、ナデと内面はケズリを施す。復元口径25.0cm。15は甕片で、口径部はく字状になる。外面は細かい刷毛目や指押さえ、内面はケズリを施す。



第19図 3・4号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/30)



第20図 1～3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

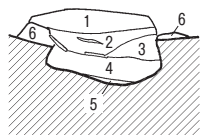
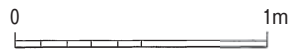
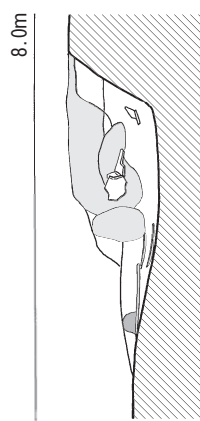
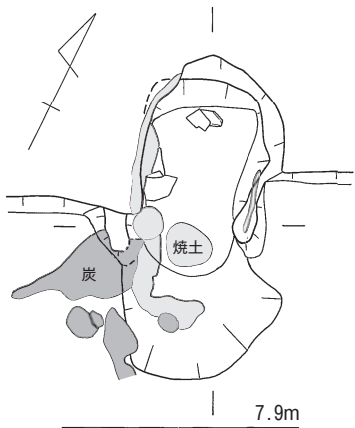
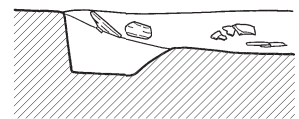
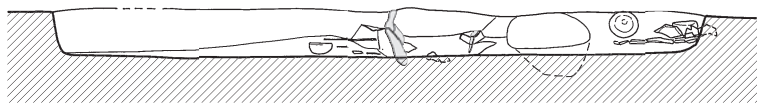
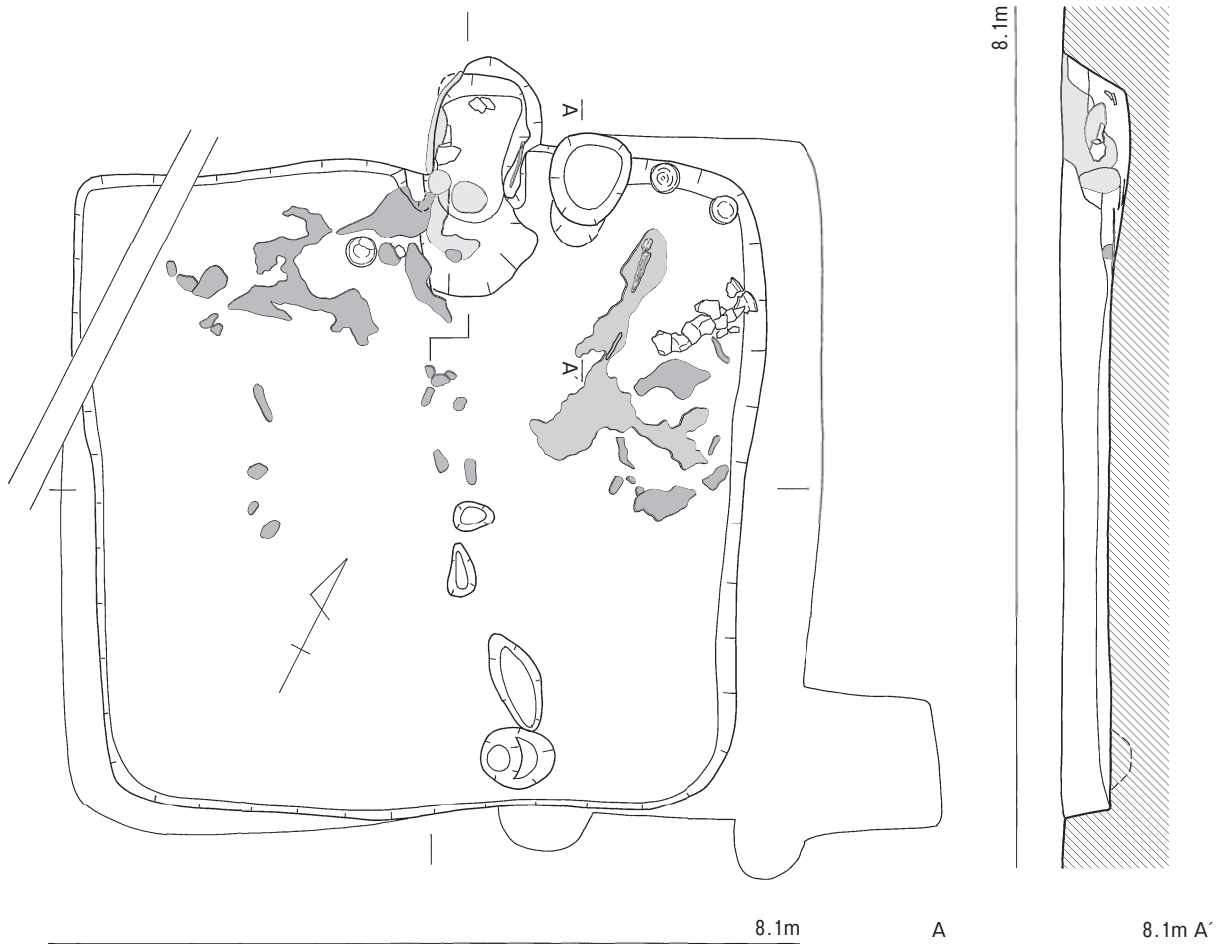
4号竪穴住居跡 (第19図、図版7)

調査区中央付近に位置し、大部分を西側にある4号溝により切られる。長方形に検出し、埋土から土器片を検出できたので竪穴住居跡とした。残存長2.9m×1.5m、深さ0.2m以下を測る。住居の主柱穴に関連するものはないが、北側には炭が混入していたピットがある。須恵器や土師器片を検出したが、図化に耐えうるものはなかった。

6号竪穴住居跡 (第21・22図、図版7・8・16・18)

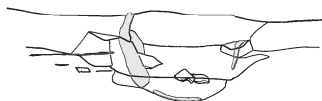
2・3号竪穴住居跡と4号竪穴住居跡の間に位置する。地山と埋土との差が識別しにくく、当初は東西方向で幅4.0mを遺構としたが、掘り下げていく内に、遺構ラインを誤認していることに気づき、3.5m～3.6mのほぼ方形状を呈する住居跡とした。深さは0.25mを測る。北東隅では完形の須恵器坏蓋・土師器坏などが北東隅の壁面に置かれた状態で出土した。またカマド周辺では、炭化材を多く検出した。

カマドは2・3号竪穴住居跡と同様な突出型のタイプで、北側壁面中央やや東よりに設置する。両袖が僅かに残存し、長さ0.3m、幅0.15m～0.2m、高さ0.15m以下を測る。両袖は被熱を帯び、赤褐色土に変色し、埋土より硬化していたので袖とした。カマドの掘削も地山との土色の違いに苦労し、煙道側を少し掘りすぎた感がある。カマドは隅丸長方形で、長さ1m、幅0.55m、深さ0.35mを測り、内部は左壁面側が特に被熱を帯びて赤褐色に硬化していた。カマドの断面はカマド前面から緩やかに中央に向かって下がり、煙道に向かって緩やかに上がっていき、煙道側で急激に立ち上がっている。カマド内の土層は、褐色土に炭や橙褐色土ブロックの量で分層する。支脚の痕跡や煙道は確認できなかった。なお、出土土器から時期は8世紀前半頃か。



8.0m

- 1 褐色土と土器片が混ざる (固く締まる)
- 2 1よりも多くの土器片含む (炭少量あり)
- 3 2より炭の量が多い
- 4 灰褐色土と橙褐色土 (焼土) が混ざる
- 5 赤褐色土 (被熱する)
- 6 赤褐色土 (カマドの袖が赤変する)



第 21 図 6号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/30)



第22図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図 (11は1/2、他は1/3)

22図1は須恵器坏蓋で完形品である。口縁端部は嘴状になり、口径16.0cm、器高2.7cmを測る。調整は内面および外面体部中位まで、回転横ナデを施し、それより天井部まではヘラケズリを施す。小田編年Ⅶ期。2～10は土師器である。2・3は坏で、3の方がやや肉厚で丸味を帯びる。3は外面底部にヘラ記号がある。それぞれ口径14.0cm・13.6cm、器高5.5cm・6.0cmを測る。調整は内面および外面体部上半はナデ、それより下半についてはケズリである。4は高台付坏の高台片で、復

元高台径 7.0cm を測る。5 は脚部以下が残存しないが高坏の坏部片か。一部口縁が赤変する。復元口径 21.0cm。6 は甕の体部上半片である。頸部はく字形に屈曲し、口縁端部に向かって大きく広がる。復元口径 28.4cm。7 は小型の甕である。8・9 は小型の甕口頸部片である。いずれも外面は摩滅するが、内面には刷毛目や板ナデの痕跡がある。復元口径 18.0cm・15.6cm。10 は甗片で 1/5 以下残存のため、把手の形状は不明である。口頸部が逆 L 字状で、体部上半で最大径となる。底部は 1 孔のみで、径 15.0cm を測る。調整は外面は刷毛目で、内面は体部中程で、ケズリの向きが異なる。11 は円形の滑石製紡錘車である。中央には 0.8cm 程の穿孔を施し、上面の端部は丸くなるが、下面は平坦である。細かく磨いた痕跡が残る。径 4.25cm、厚さ 1.05cm、重さ 34.4g。

7～9号竪穴住居跡（第23・26図、図版8）

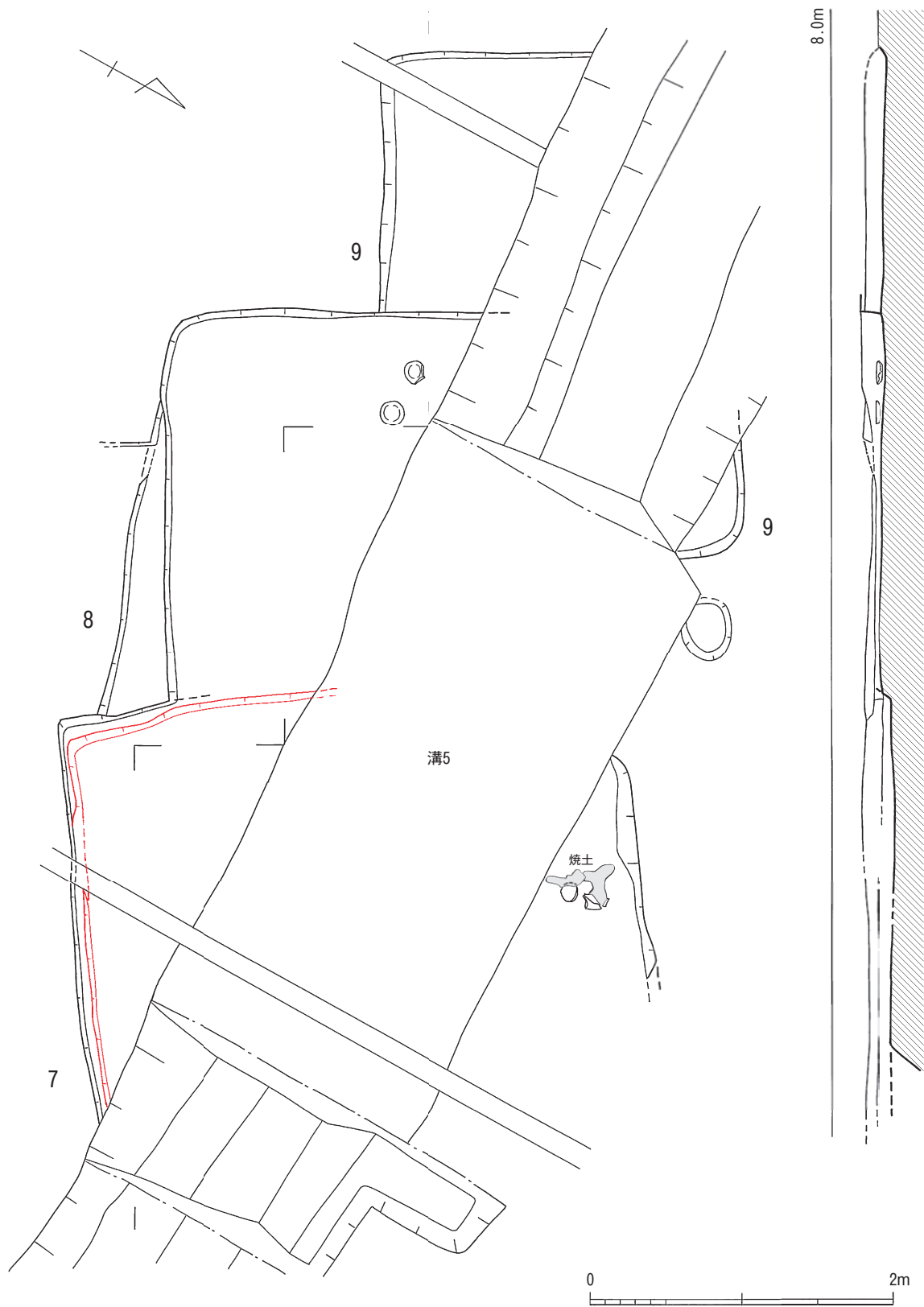
6号竪穴住居跡の北西側に位置し、中央を5号溝に切られる。遺構の前後関係は、西側の9号が最も古く、次に8号→7号の順となる。7号竪穴住居跡からは北側の壁面付近から土師器が出土した。長さは長軸で3.7m、残存長で2.65mを測る。8号竪穴住居跡は3つの住居跡の中央に位置する。南側1/3以下の残存長2.6m×2.2mのみ残存する。5号溝近くで土師器の坏2点がほぼ完形で出土した。9号竪穴住居跡は西側に位置し、最も残存状況が良くない。南側に残存長1.7m×1.35m、北側に1m以下の範囲で残存する。いずれも深さ0.2m以下と浅くカマドは検出できなかった。いずれも出土土器は8世紀前半から中頃のもののか。

26図1～4は7号竪穴住居跡出土である。1は須恵器の坏蓋口縁部片である。口縁端部は僅かに嘴状になる。2は土師器の坏片で、外面底部はヘラケズリである。復元口径15.0cm。3は土師器の甕片である。頸部で内湾し、口縁端部で大きく外に開く。頸部内面に接合痕が残る。4は甗の底部片か。外面は刷毛目、内面はケズリを施す。5～8は8号竪穴住居跡出土である。5・6は土師器の坏である。外面底部はヘラケズリである。7は土師器の高台付坏、又は壺の底部片か。他の坏と比べて、肉厚でしっかりとした作りである。復元高台径13.0cm。8は甕片で、口縁部で僅かに屈曲する。外面はナデ、内面はケズリである。復元口径15.0cm。9は土師器の甕の口頸部片で、9号竪穴住居跡出土である。口縁部は内外面ナデであるが、頸部以下は外面に刷毛目、内面にはケズリを施す。

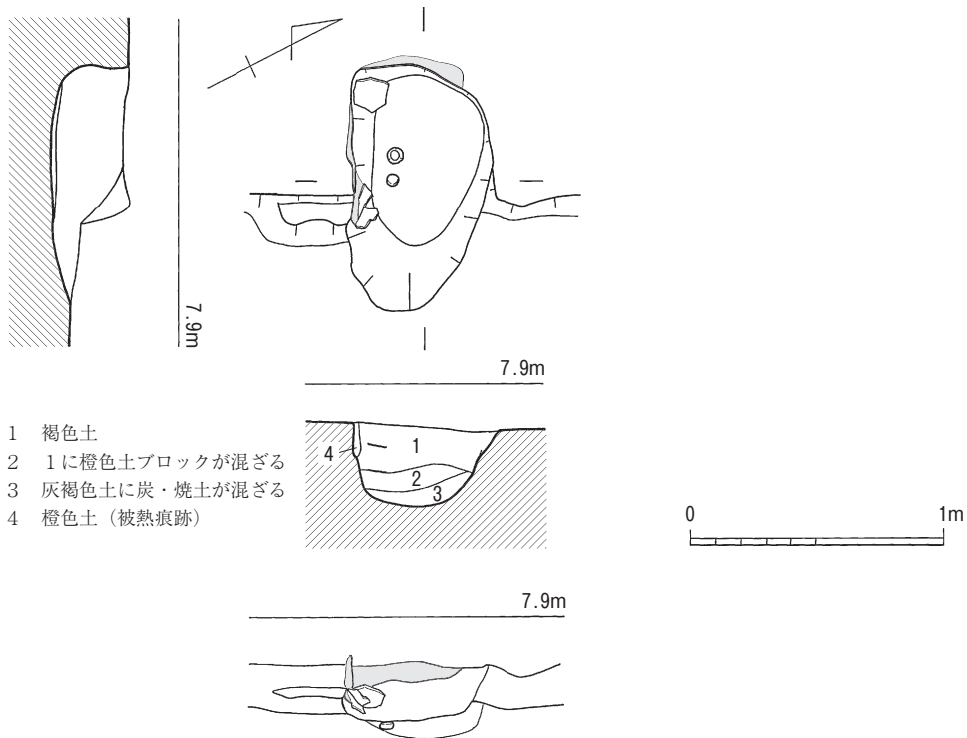
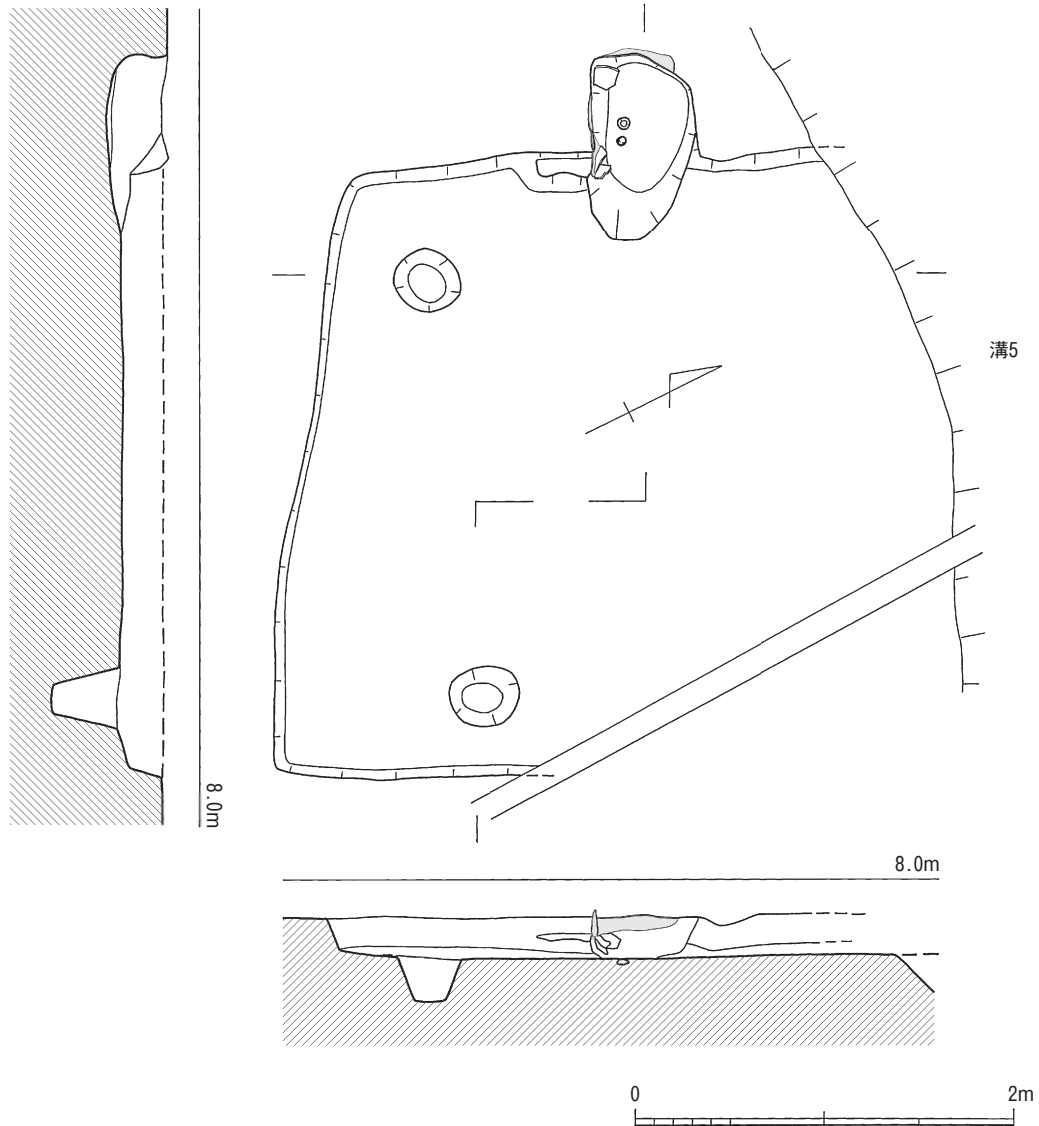
10号竪穴住居跡（第24・26図、図版9）

6号竪穴住居跡の北東に位置し、5号溝や暗渠により東～南側を切られる。形状は長方形で南側が東西に少し広がるため、長さは3.3m×3.5m以上、深さ0.2mを測る。床面からは西側で支柱穴と思われる柱穴を2つ検出し、径0.3m・0.4m、深さ0.25m・0.4mを測る。埋土は褐色土で、これも他の住居跡同様に埋土と地山との識別が困難だった。

カマドは2・3・6号竪穴住居跡と同じ突出型のタイプである。北壁側の中央に設置し、僅かにカマドの左袖が残存していた。カマドの左袖は長さ0.2m以下、幅0.4m、高さ0.1mを測り、褐色土が被熱により硬化していた。カマド内部は崩れた長方形で、0.95m×0.55m、深さ0.1m～0.4mを測る。底面中央西には、平たい河原石（5cm以下）1つを検出した。カマドの断面はカマド前面から緩やかに中央に向かって下がり、煙道側に向かって垂直に立ち上がる。カマド内の壁面は被熱を帯びて赤褐色に硬化していた。カマド内の土層は、褐色土に土器・炭・橙色土ブロックが混ざっ

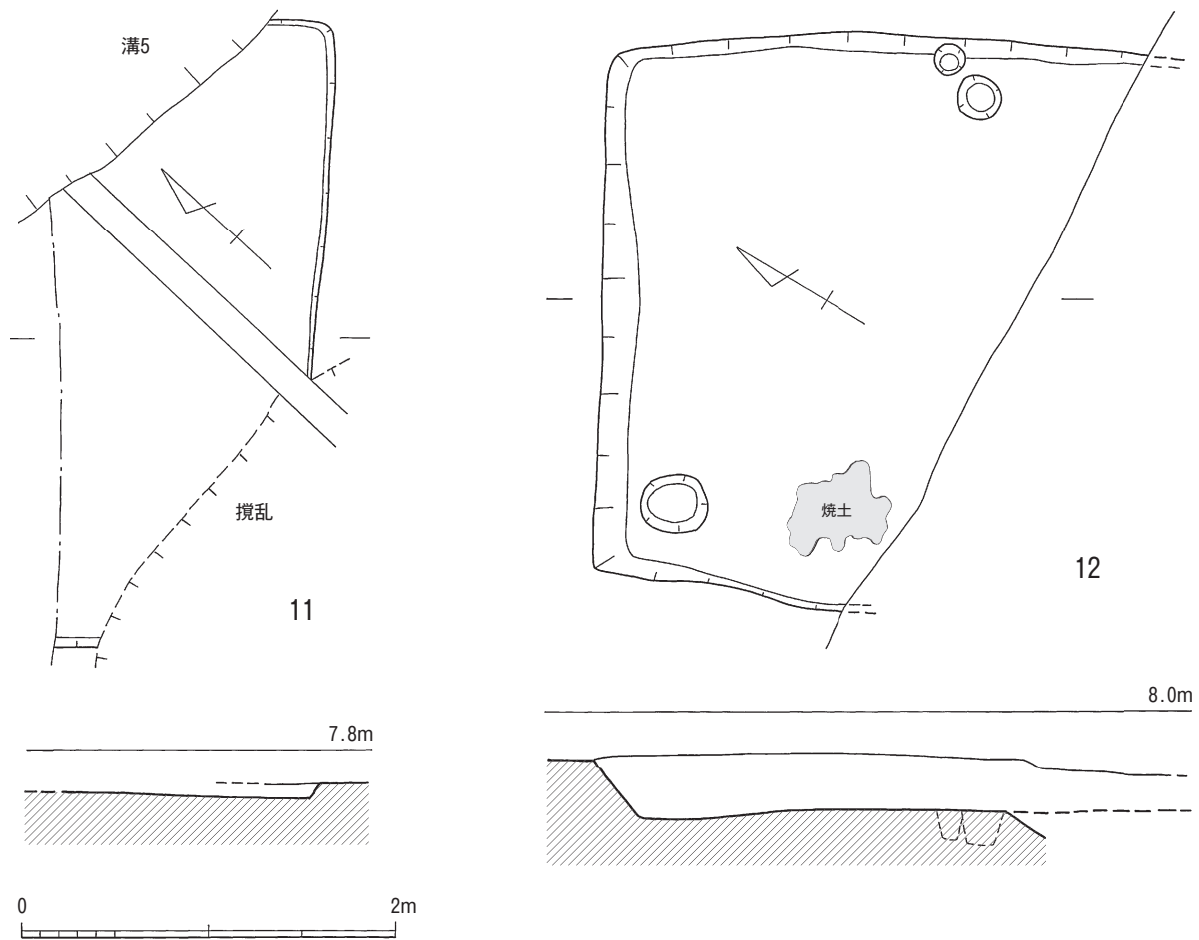


第 23 図 7~9号竪穴住居跡実測図 (1/40)



- 1 褐色土
- 2 1に橙色土ブロックが混ざる
- 3 灰褐色土に炭・焼土が混ざる
- 4 橙色土(被熱痕跡)

第24図 10号竪穴住居跡・カマド実測図(1/40、1/30)



第 25 図 11・12 号竪穴住居跡実測図 (1/40)

た量により大きく 3 層に分けられる。竪穴住居跡の時期は、出土土器から 8 世紀か。

26 図 10 は弥生土器の甕口縁部片である。この 1 点のみ出土した。混入品か。11～15 は土師器である。11・12 は坏の口縁部片である。調整は内外面ともにナデである。13 は甕又は甑の口縁部片である。14 は甕片で、口縁端部で屈曲する。外面は刷毛目、内面はケズリを施す。15 は土師器甑の把手で、把手の先端部は欠損する。内面はケズリだが、把手の外面は強い指ナデが残る。

11 号竪穴住居跡 (第 25・26 図、図版 9・18)

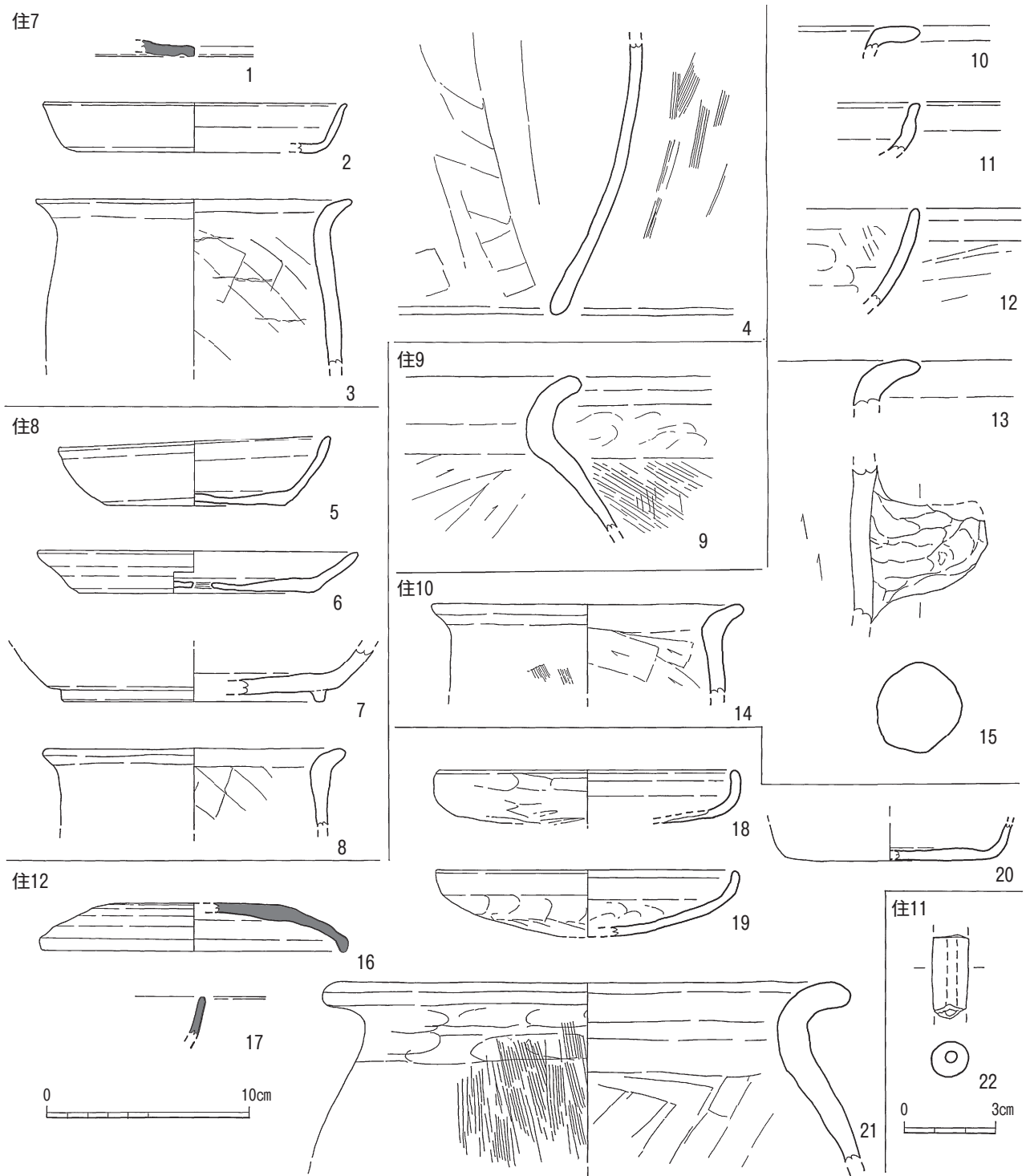
4 号竪穴住居跡の東側に位置し、北側を 5 号溝、南西側を圃場整備前の攪乱に切られる。長軸で 3.3m と残存長で 1.35m、住居跡として 1/3 以下が残存する。深さも 0.1m 以下と僅かしか残っていないが、周辺から 4 号竪穴住居跡を検出したことや長方形を呈することから住居と判断した。

図化に耐えうるものはないが、土錘 1 点のみ掲載した。

26 図 22 は両端部を欠損した土錘で、残存長 2.7cm、厚さ 1.2cm を測る。

12 号竪穴住居跡 (第 25・26 図、図版 9)

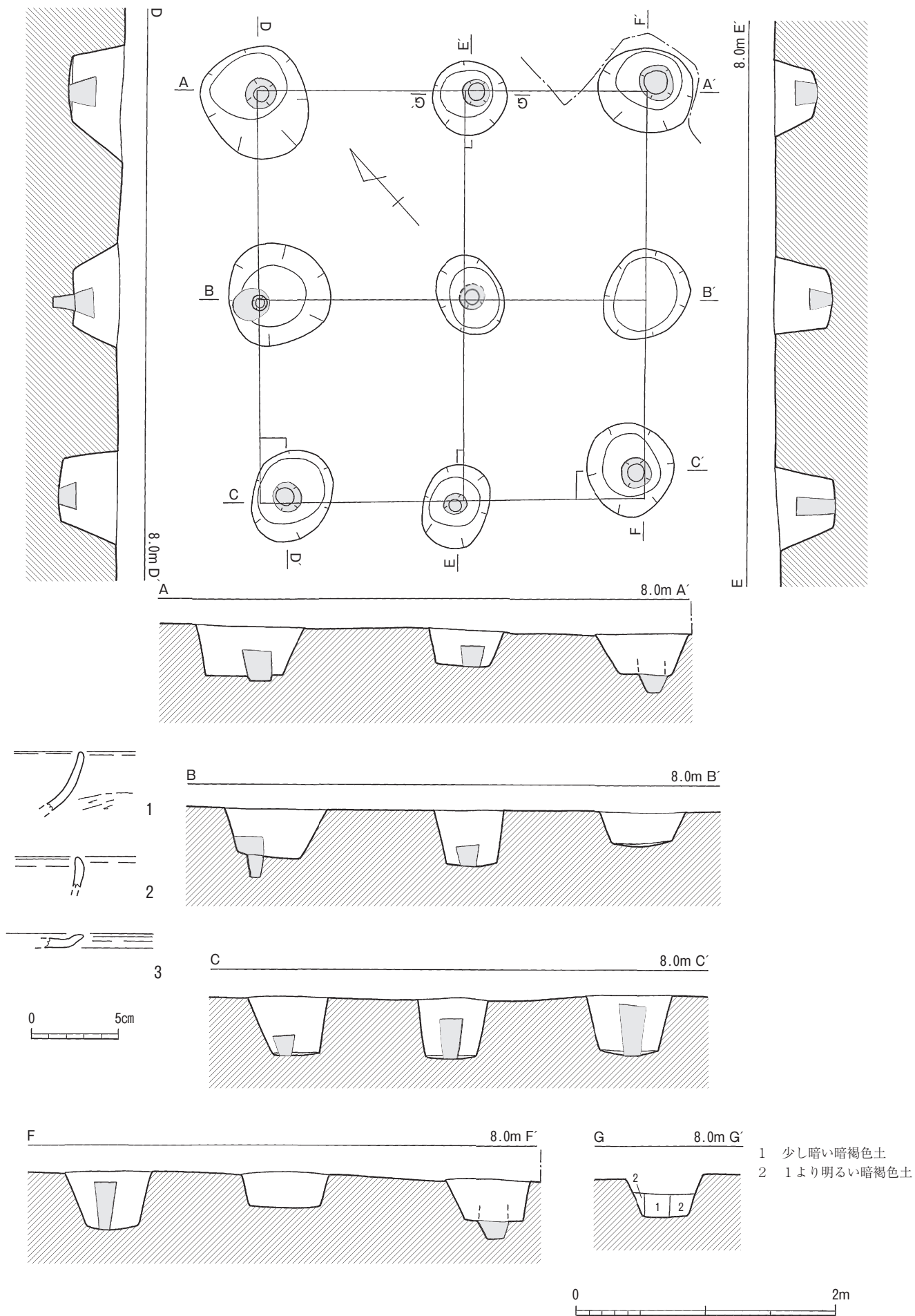
11 号竪穴住居跡の北側に位置し、南側半分を 6 号溝に切られている。残存長 2.9m 以上と短軸で 2.8m を測ることから、形状は方形に近い可能性がある。深さは他の住居跡より残存し、0.3m～0.35m を測る。東壁には径 0.2m 以下で、深さ 0.2m の浅いピットを 2 基検出した。西側の壁面付近



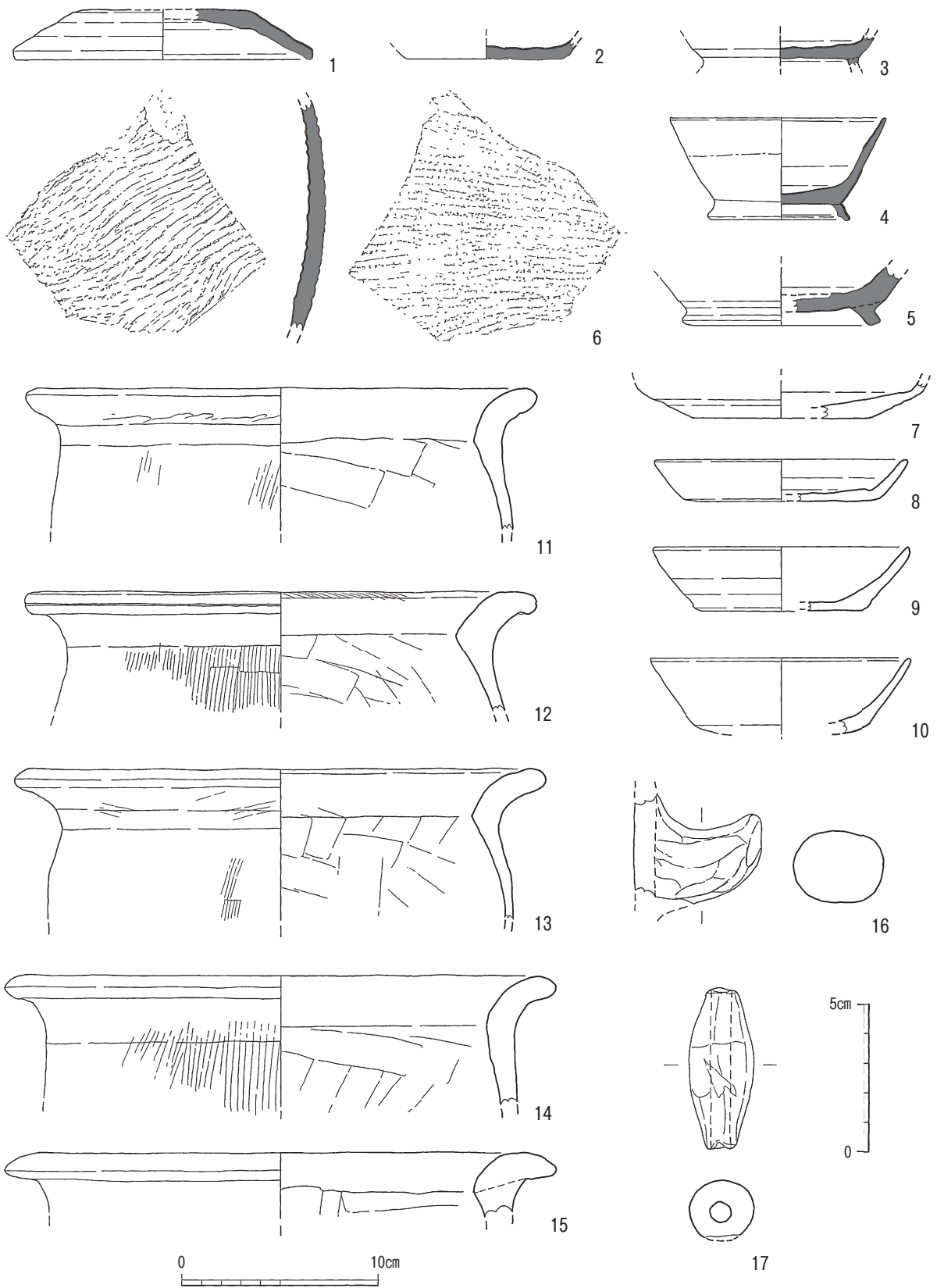
第 26 図 7～12 号竪穴住居跡出土遺物実測図 (22 は 1/2、他は 1/3)

には焼土が 0.4m × 0.4m の範囲で検出しており、西壁側にカマドがあったと判断し、住居跡とした。出土土器から 8 世紀前半頃か。

26 図 16 は須恵器の坏蓋で、口縁端部は嘴状になる。天井部付近のみヘラケズリを施し、平坦になる。復元口径 15.2cm。17 は須恵器の坏口縁部片である。18～20 は土師器である。18・19 は坏片で、口縁下で屈曲し、端部は直立する。底部を欠損するが、器形から 18 は平底、19 は丸底状になる。18 のみ外面底部に板状圧痕が残る。いずれも復元口径 15.0cm。20 は坏の底部片で、摩滅して調整は不明である。復元底径 10.6cm。21 は土師器の甕口頸部片である。頸部はく字状になり、



第 27 図 1号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)



第28図 2号土坑出土遺物実測図 (17は1/2、他は1/3)

口縁端部に向かって開く。調整は外面に刷毛目とナデ、内面にナデとケズリを施す。復元口径26.0cm。

3-2 掘立柱建物跡 (第27図、図版10)

調査区北東隅側で検出した掘立柱建物である。2×2間の総柱建物跡で、N-48°-Eで北東向

きに建てられている。柱穴は長円形状で長さ 0.5m ～ 0.85m、深さは 0.25m ～ 0.45m、柱間は 1.4m ～ 1.6m を測る。これも住居跡同様に褐色土の色の識別に苦労したが、径 0.3m 以下の柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。柱穴からの出土土器は少なく、須恵器片等から竪穴住居跡と同時期のものと考えられる。なお、これ以外には建物跡は確認できなかった。

27 図 1 ～ 3 は土師器の坏片である。

3-3 土坑

2号土坑（第 12・27・28 図、図版 10・18）

調査区西端の中央付近に位置する。上面の形状は長円形状を呈し、長さ 1.3m × 1.1m を測るが、底面はほぼ円形で径 0.65m ～ 0.7m となり、狭くなる。深さ 1.25m を測り、この付近から地山の層位が変化する。西側では上面から 0.35m 下で、テラスになる。当初、土坑としたが、少し浅い井戸の可能性もある。時期は出土土器から 8 世紀前半から中頃か。

28 図 1 ～ 6 は須恵器である。1 は坏蓋で、天井部は平坦でヘラ切り後ナデを施す。2 は坏の底部片である。3 ～ 5 は高台付坏である。4 と 5 のみ高台が残存し、4 の端部は細く外に開くが、5 は方形で僅かに外へ伸びる。4 は復元口径 11.0cm。6 は甕の体部片で、内外面は平行タタキである。7 ～ 16 は土師器である。7 は坏の底部片か。8 ～ 10 は坏片である。いずれも摩滅するが、内外面はナデ調整か。復元口径 11.8cm・13.0cm・13.2cm。11 ～ 15 は甕又は甑の口頸部片で、頸部で屈曲し、口縁端部は肉厚で外に向かって伸びる。外面は刷毛目、内面はケズリを施す。復元口径 26.0cm・26.0cm・27.0cm・28.0cm・28.0cm。16 は甑の把手片である。17 は土錘で、中央で大きく膨らみ、両端部に向かって窄まる形状である。長さ 5.45cm、厚さ 2.2cm。

4 溝（第 29 ～ 32 図、図版 10 ～ 13）

溝は 18 条検出したが、遺構として判断できる 14 条の溝のみ報告する。

1号溝（第 29・30 図、図版 10）

調査区南西隅で検出した南北方向に直線上に延びる溝である。北側は調査区外まで延びているが、南側は圃場整備前の水路で切られている。検出長 11.5m、幅 1.6m 以下、深さ 0.7m 以下を測る。土層断面の観察から、溝は当初、幅 1.2m、深さ 0.7m の逆三角形形状であったが、溝が埋没後に 1 度掘り直し、幅 1.1m、深さ 0.4m の半円状となる。その後も深さ 0.1m ～ 0.2m 程の浅い溝として使用されていたと思われる。

30 図 1 は土師質鍋の口縁部片である。外面には煤が付着し、指押さへの跡が残る。内面は刷毛目である。2・3 は磁器である。2 は碗の口縁部片である。外面は 2 条の圏線の間、唐草文を描くか。内面には 2 条の圏線がある。3 は碗の高台片である。外面の高台内には砂が付着する。

2号溝（第 29・30 図、図版 10）

1号溝の東側で検出した南北方向に延びる溝である。1号溝と同様に北側の調査区外まで延びるが、南側は圃場整備前の水路で切られる。検出長 14.3m、幅 1.6m ～ 2.0m、深さ 1.1m を測る。溝断面は逆三角形に近い形状で、一部暗渠に切られる。埋土は 4 層に分けられ、上 2 層は茶灰色土、

暗灰色土と比較的締まった土質だが、下2層は暗灰色粘質土と青灰色粘質土に変わる。いずれの層からも土器片が出土する。

30 図4は須恵器の高台付坏の高台片である。高台の断面は逆台形状を呈する。復元高台径 9.8cm。5は磁器の皿口縁部片で、内面の端部は口禿である。

3号溝（第29・30図、図版11）

2号溝の東側に位置し、ほぼ東西方向に直線上に延びる溝である。長さ 4.2m、幅 0.4m～0.6m、深さ 0.1m を測る。溝の断面は逆台形で、埋土は茶褐色土の単層で、土師器が出土する。

30 図6は土師器皿で、内外面は横ナデ調整だが、外面底部はヘラ切りである。復元口径 17.0cm。

4号溝（第29・30図、図版11）

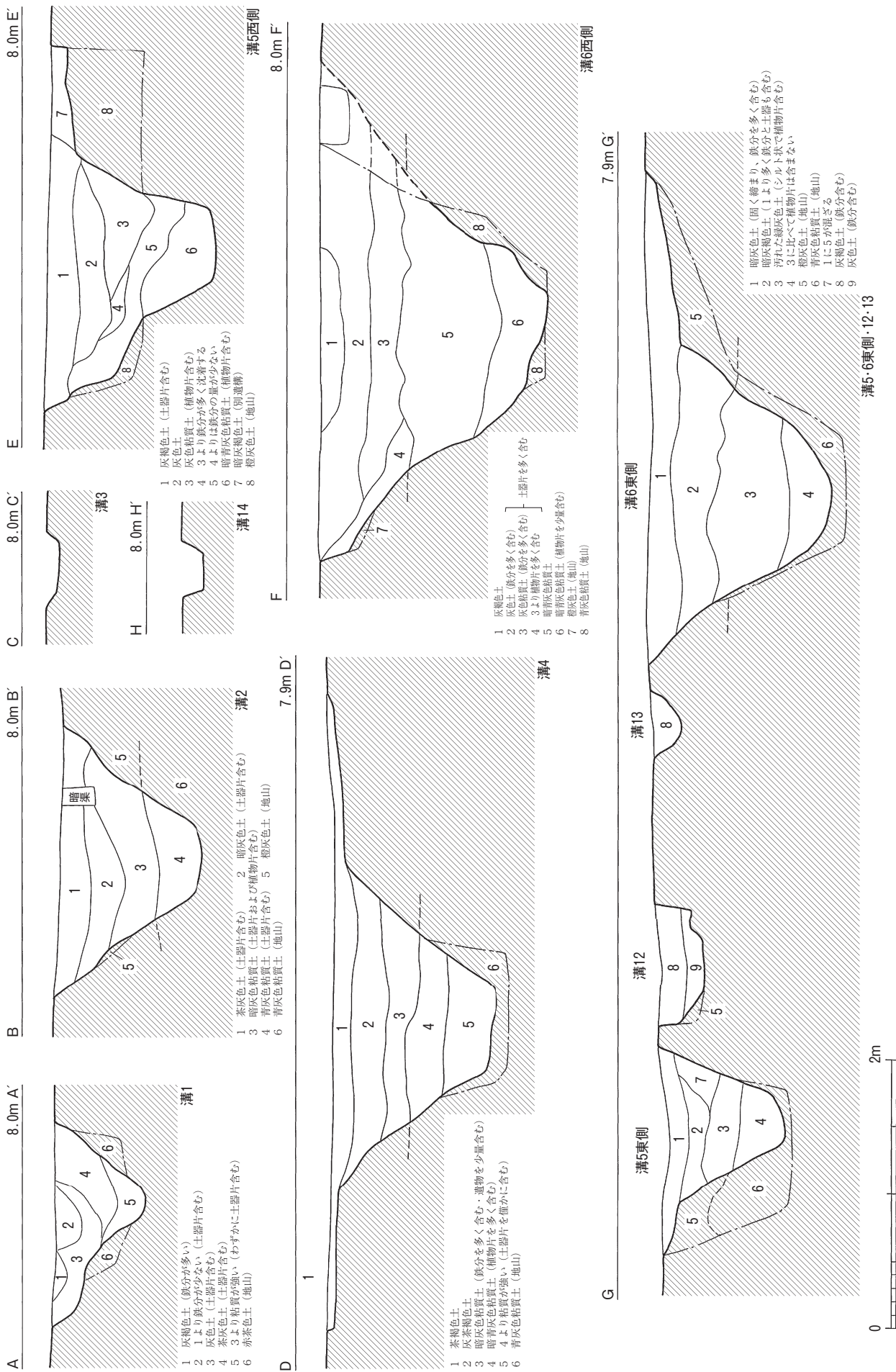
4号溝は調査区南側に位置し、1号竪穴遺構や4号竪穴住居跡を切る南北方向に延びる溝である。北側は東西方向に延びる5号溝と合流するが、南側は圃場整備前の水路に切られる。検出長 21m、幅 2.4m、深さ 1.2m を測る。溝の底面は 0.6m 程と平坦となり、溝断面は逆台形状となる。埋土は1・2層で固く締まるが、3層以下は粘質土になる。灰色系の土色であることから、弥生・奈良時代の遺構の埋土とは異なる。下層の4・5層の土色はほぼ同じであるが、土質や遺物量によって分層した。地山に近い5層からは遺物の出土は少ない。なお、5号溝と合流後に6号溝との間に浅い溝があるが、4号溝の形状から考えて、別の溝と判断した。

30 図7は磁器の碗口縁部片で、文様などは施されていない。

5号溝（第29・30図、図版11）

5号溝は調査区中央に位置し、東西方向に延びる溝である。検出長 53m、幅 0.5m～2.4m を測り、西側は調査区外に延びるが、東側は東に進むほど溝幅も狭くなり、東端で北へ屈曲して窄まる。深さは場所により変わるが、0.3m～1.3m を測る。4号溝との合流部のみ、深さ 2.0m と他より深く掘られている。これはこの場所を緩やかなスロープ状にし、中央部分に不整形にさらに深さ 0.3m 程掘削することで水が溜まりやすくしたのではないかと思われる。そのため、一度この場所で水を溜め、溢れ出た水だけを4号溝を使って排水していたと思われる。埋土は西側土層で、上層～中層の1～5層までが灰色土で、下層ほど粘質土になる。最下層の6層のみ地山に近い暗青灰色粘質土になる。東側土層は上層1・2層が暗灰色土、下層3・4層が緑灰色土になる。遺物は上層で少量出土するが、下層では遺物の出土はさらに少なくなり、植物片が混ざる。

30 図8は弥生土器の底部片である。底部は平底で中央付近には径 2cm 程の穴があき、外側から穿孔を施す。9は須恵器の甕口頸部片である。内外面とも横ナデである。復元口径 22.4cm。10は瓦質土器の火鉢片である。外面の突帯間には菊花文のスタンプがある。内面は刷毛目である。11は龍泉窯系青磁碗の体部片である。青緑釉が施されていて、外面には僅かに連弁が残る。12は同安窯系青磁碗の体部片である。黄緑釉が施されていて、内外面に櫛描文がある。13は土師質の灯明皿である。外面の口縁端部が一部焦げている。復元口径 8.0cm。14～16は陶器である。14と15は皿である。14は鉛色の釉を施す瀬戸焼か。外面高台のみ露胎する。15は唐津焼の皿で、内面見込みに鉄釉で草花文を描く。16は壺又は瓶の体部片か。内面は露胎し、タタキの痕跡が残る。



第29図 1~6・12~14号溝土層断面実測図 (1/40)

外面は上半のみ藁灰釉を施す。17は磁器の猪口の高台片で、外面高台は露胎する。

6号溝（第29・30図、図版11・12・17）

5号溝の北側で検出した東西方向に延びる溝で、西側は一部暗渠により攪乱を受けている。5号溝同様に西側は調査区外に延びるが、東側で南北方向に延びる18号溝と19号溝と合流する。19号溝と合流した東側には同一直線上に21号溝がある。しかし、これは6号溝とは溝幅も異なるので、別の溝と判断した。検出長47m、幅3.3m～4.5m、深さは1.4m～1.8mを測る。

西側土層断面の観察から、土層はほぼ水平に堆積するが、東側と西側で深さが30cm程異なる。東西で高低差があることから、東側から西側へ水が流れていたことを表していると思われる。埋土は上層に灰色や暗灰色系土で、下層は青灰・緑灰色土となる。中下層からは植物片が混入する。

30図18は弥生土器の鉢で、9割ほど残存する。全体的に肉厚に作られている。19は須恵器の坏蓋で、竪穴住居跡の遺物が混入したものか。断面は嘴状になり、天井部までの高さがあるので、小田編年Ⅶ期頃のものか。20は瓦質土器の口縁部片である。僅かに花文のスタンプが外面に残る。21・22は陶器の皿片である。21は唐津焼の皿で、内面に草花文を鉄釉で描く。22は内面見込みに胎土目が3ヶ所残る。23は磁器の皿片で、内面見込みの2条の圏線間に如意頭の文様を描く。外面高台内には砂目が付着する。24は火入れ片で、内面は鉄釉、外面は白化粧土で、その上に銅緑釉が垂れている。外面体部下半より下は露胎する。

12・13号溝（第29・30図、図版12・18）

5号溝と6号溝に挟まれ、東端を19号溝に切られる。南側を12号溝、北側を13号溝で、2つの溝は並行して東西方向に延びる。12号溝は5号溝の北側に位置し、5号溝と6号溝に繋がる溝に切られる。検出長29m、幅0.7m～1.0m、深さ0.4m以下を測り、溝断面は逆台形状となる。北側の13号溝は、長さ25.5m、幅0.3m～0.6m、深さ0.2mを測り、溝断面は逆三角形形状になる。埋土は他の近世溝と同じ灰色土系に分けられることや、13号溝では石臼が出土したことから江戸時代頃か。

30図25は12号溝出土で、陶器皿の底部片である。外面底部は露胎する。26と27は13号溝出土である。26は土師質鍋の口縁部片か。外面には煤が付着する。27は瓦質土器の播鉢片で、内面に櫛目が残る。28は滑石製の石臼下である。全体的に摩滅して、側面や下面は欠損している。擦り面の上部のみが1/2程残存する。

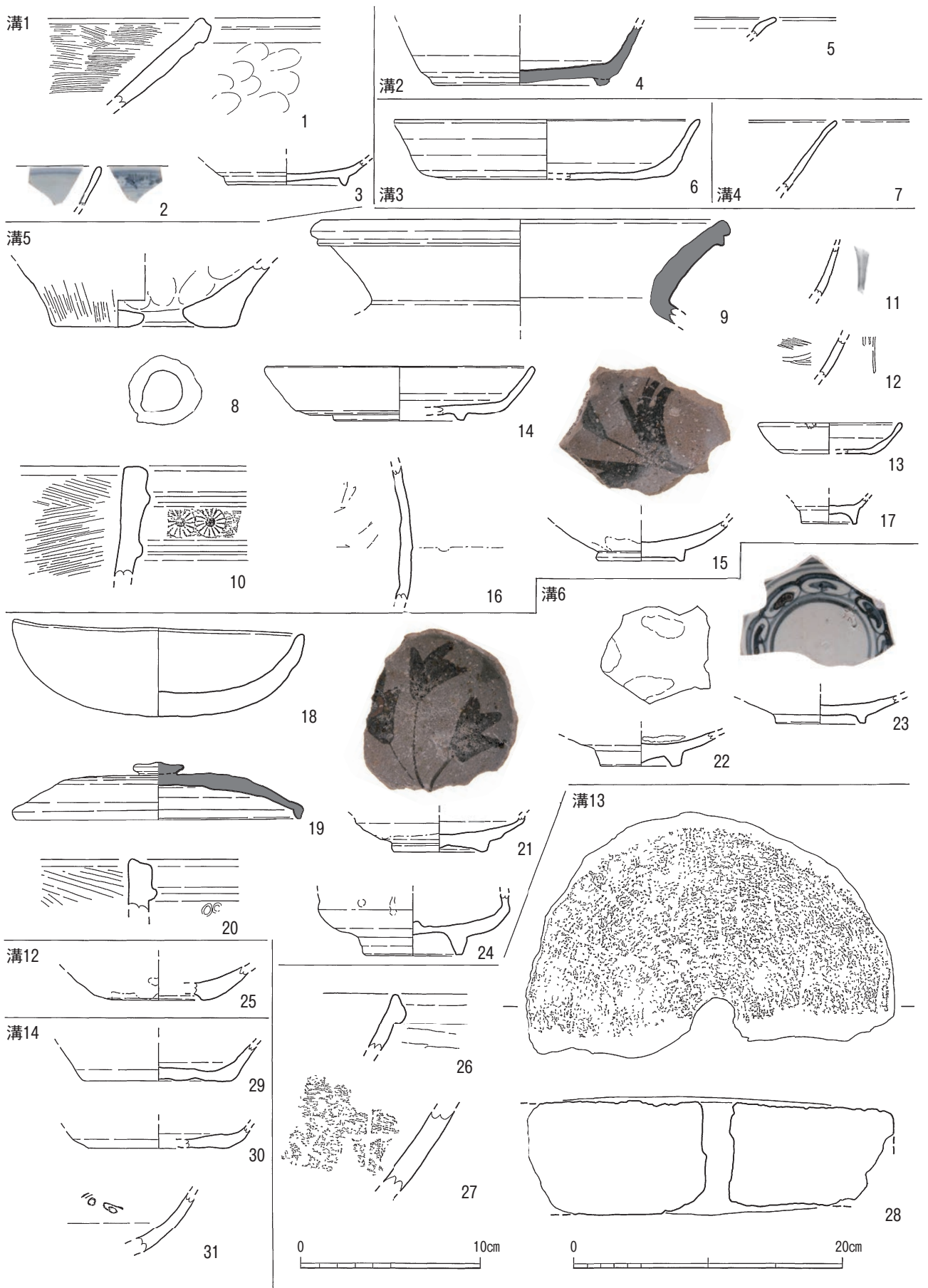
14号溝（第29・30図、図版12）

2号竪穴遺構の西側で検出した東西方向に直線上に延びる溝である。長さ9.3m、幅0.5m以下、深さ0.2mを測る。断面形状は逆台形状である。埋土は暗褐色土で、唯一中世の青磁碗片を出土した。

30図29と30は土師器の坏片で、いずれも糸切りか。29は外面底部に板状圧痕が明瞭に残る。31は龍泉窯系青磁碗の体部片である。内面に僅かに櫛描文を施す。

18号溝（第31・32図、図版12）

南側を6号溝に切られ、南北方向へ直線上に延びる。北側は調査区外まで延びているため、検出



第30図 1~6・12~14号溝出土遺物実測図 (28は1/4、他は1/3)

長 30m、幅 1.5m ～ 2.5m 以下、深さ 0.9m ～ 1.2m を測る。断面形状は逆台形状になる。埋土は上層は暗灰色系で、下層は青灰色粘質土となる。南側土層の 5 層の一部が変色をしていた。

32 図 1 は須恵器の甕の頸～肩部片である。外面の頸部上半には二条の沈線が巡る。外面は平行タタキ、内面は同心円文である。2 と 3 は陶器の火入れ片か。2 と 3 の口縁部は釉剥ぎされ、露胎となる。3 は鉄釉の上に藁灰釉が少し付着する。復元口径 19.0cm、16.0cm。

19 号溝（第 31・32 図、図版 13・17）

18 号溝の東側で、南北方向に延びる溝である。北側は調査区外まで延びるが、6 号溝と合流した位置から南側は二手に分かれる。検出長は 43m、幅は 2.9m ～ 4.4m と二手に分かれた溝の内、西側の a で 1.5m、東側の b で 2.5m ～ 2.7m である。深さは北側で 1.2m と 18 号溝と変わらない深さになるが、南側の a で 0.6m、b で 0.9m とやや浅くなる。溝断面の形状はいずれも逆台形状であるが、北側では上層に向かって大きく開いた形状になる。埋土はいずれも灰色系で、上層の出土遺物から江戸時代に埋没か。

32 図 4 ～ 6 は弥生土器である。4 は甕片で、内外面ともに刷毛目である。復元口径 29.0cm。5 は高坏である。全体的に肉厚の作りで口縁部は内湾する。坏部との接合部は粗いケズリだが、それ以外はナデである。脚部の一部が欠けるが、ほぼ完形品である。6 は器台で、8 割ほど残存する。外面の口縁部は明瞭な指ナデにより、口縁端部が嘴状になる。外面は板状工具によるナデで、工具痕が所々に残る。内面は口縁部は刷毛目であるが、それ以外はナデである。7 も弥生土器の壺、又は瓢形土器の口縁部片か。他の弥生土器と比べて、胎土が緻密である。口縁端部に向かって内傾し、外面には 1 条の突帯が付く。8 は現川焼の碗の高台片か。内外面は白化粧土による刷毛目模様を施す。9 は磁器の皿片で、内面に草花文を描くか。外面体部下半および内面見込みは露胎する。

20 号溝（第 31 図、図版 13）

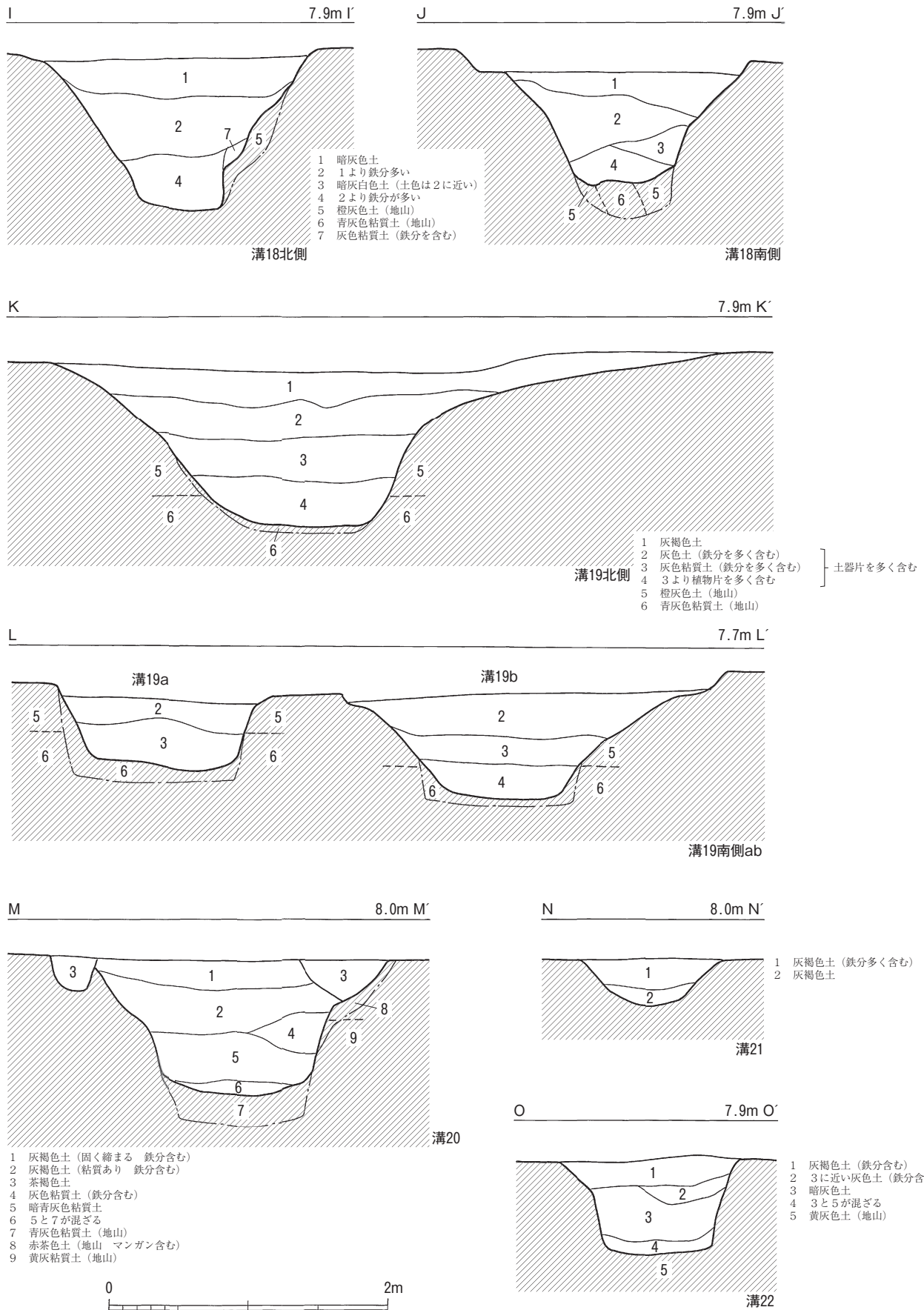
19 号溝の東側に位置し、東西方向に延びる溝である。東側は調査区外へ延びるが、西側は 19 号溝に繋がる。検出長 16.5m、幅は 1.0m ～ 2.4m と 19 号溝に向かうにつれて幅が狭くなる。深さは 1m を測り、遺構検出時および土層観察から溝の両端は新しい溝に切られる。溝断面は逆台形状で、底面は緩やかな弧を描く。埋土は大きく灰色土と暗青灰色粘質土の 2 層に分けられる。

21 号溝（第 31 図、図版 13）

20 号溝の南側に位置し、東西方向に延びる溝である。東側は調査区外へ延びるが、検出長 14m、幅 0.8m ～ 1.0m を測る。深さは 0.3m と浅い。溝断面は緩やかな逆台形状で、埋土は灰褐色土と他の近世溝の上層と同様な土色である。

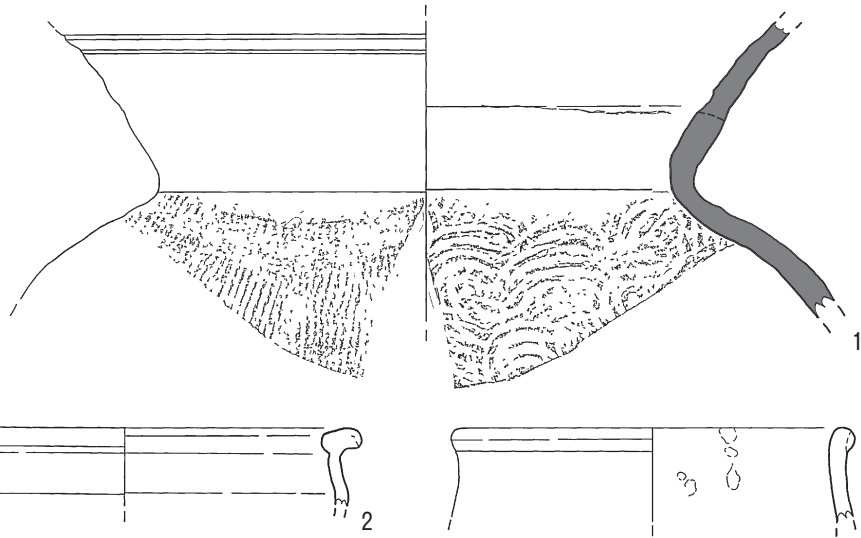
22 号溝（第 31 図、図版 13）

20 号溝の南側に位置し、東西方向に延びる溝である。東側は調査区外へ延びるが検出長 9m、幅 1.2m ～ 2.0m と 19 号溝との接続する西側部分で幅が広がる。深さは 0.65m を測り、溝断面は逆台形状である。埋土は灰褐色土と他の近世溝の上層と同様な土色である。

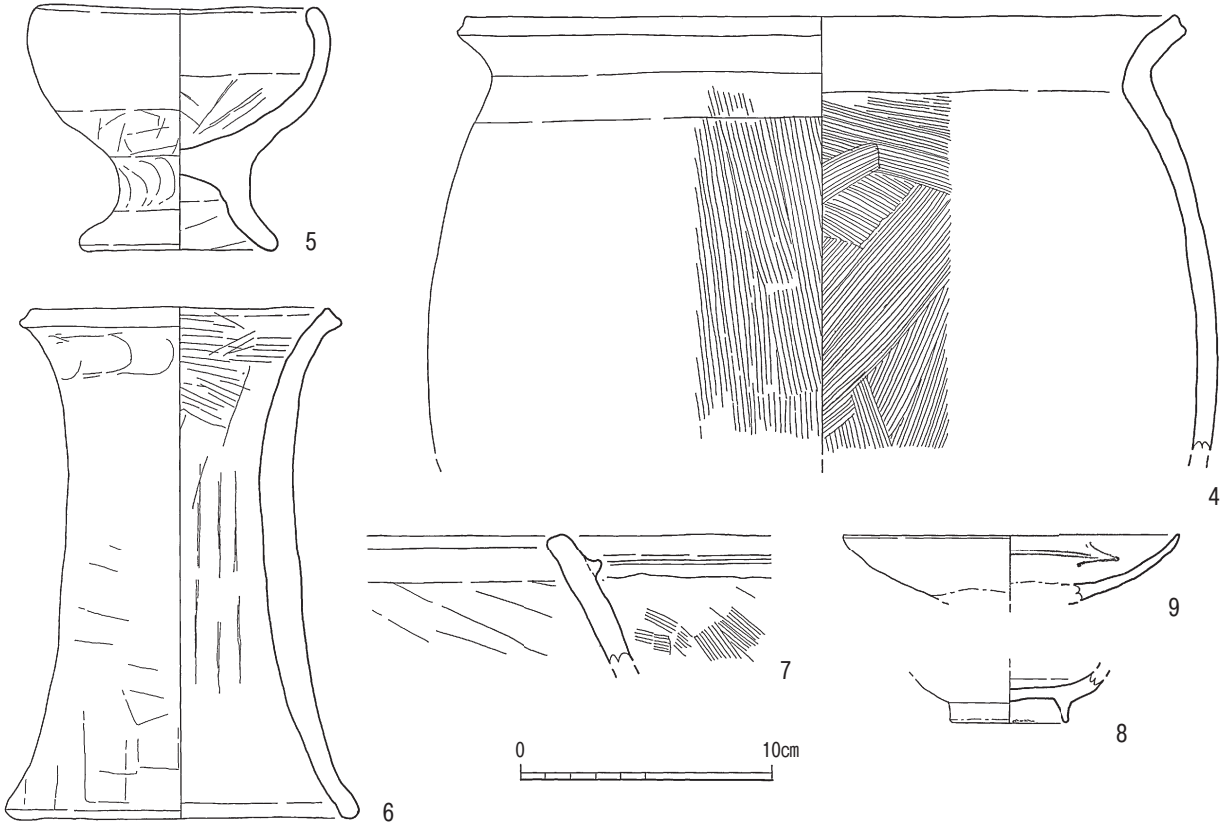


第31図 18～22号溝土層断面実測図 (1/40)

溝18



溝19

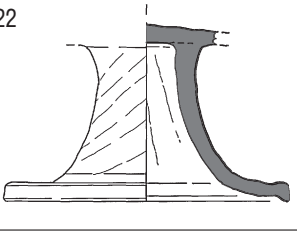


第 32 図 18・19 号溝出土遺物実測図 (1/3)

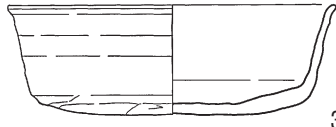
5 ピット出土遺物 (第 33 図、図版 17)

33 図 1 は須恵器高坏脚部片である。脚端部は屈曲し、嘴状になる。P22 出土。2 は土師器坏である。底部はヘラ切りである。口径 12.3cm を測る。P58 出土。3 ~ 5 は P63 出土である。3 と 4 は土師器の坏である。4 は皿に近い形状で、外面底部を板状工具で強くナデすぎたため、工具痕が外面に強く残る。5 は土師器の甕である。復元口径 24.0cm。6 は須恵器の高台付坏片で、口縁部を欠損する。高台の脚端部は逆台形状で外には広がらない。8 世紀代か。7 は土師器の鉢である。外面は刷毛目後にナデ、内面は粗いケズリを施す。外面に煤が付着しているので鍋として使用か。P92 出土。8

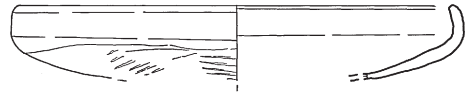
P22



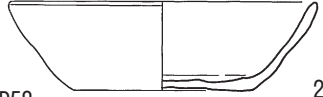
1



3

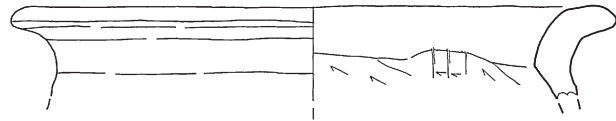


4



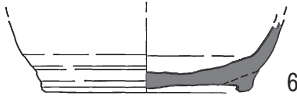
2

P63

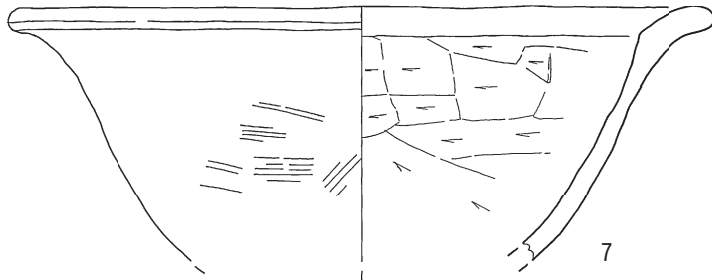


5

P58



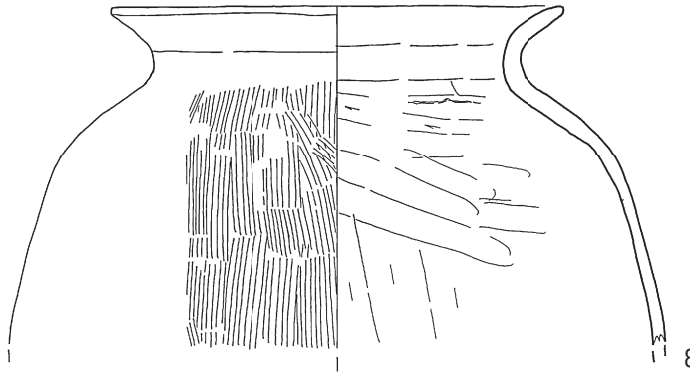
6



7

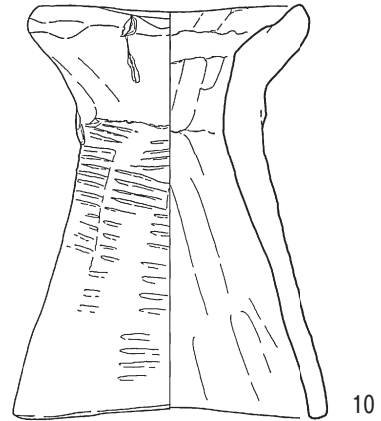
P92

P150

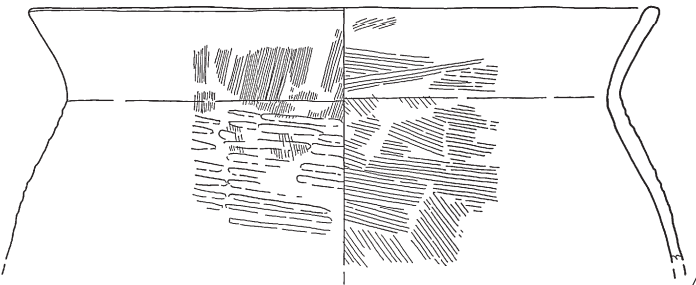


8

P246

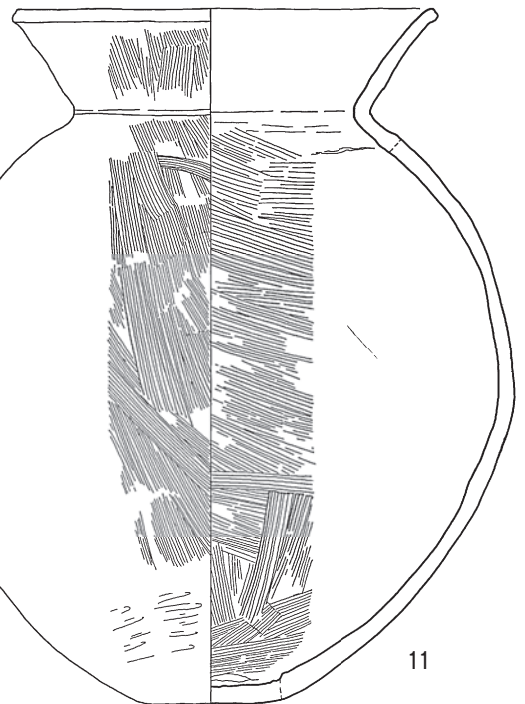


10



9

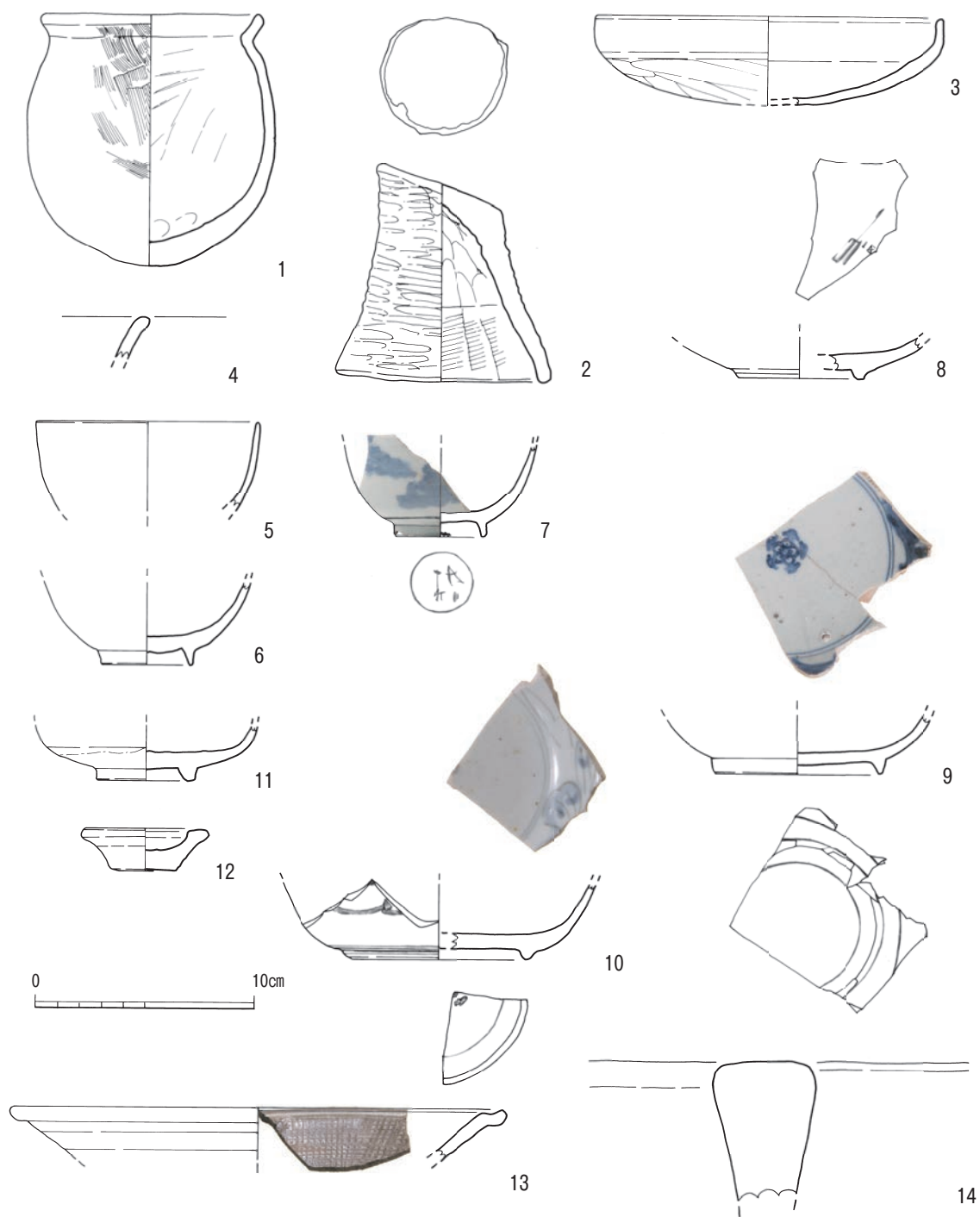
P257



11



第 33 図 ピット出土土器実測図 (1/3)



第34図 遺構検出出土遺物実測図(1/3)

は土師器の甕である。外面は刷毛目で、内面は粗いケズリを施す。9は弥生土器甕片である。内外面は刷毛目だが、外面のみタタキを施す。P150出土。10は弥生土器の器台である。上部を厚手に作り、脚端部に向かって器壁は薄く、緩やかに広がる。内面や外面上部は強いナデで成形し、屈曲部以下はタタキを施す。P246出土。11は弥生土器の甕で、全体的に薄手に作られている。器形は体部中で最大径をとる球体状で、頸部は窄まり、く字状に屈曲し、外に大きく開く。内面頸部付近に接合痕があるが、内外面は刷毛目である。底部は凸レンズ底になる。弥生時代終末頃か。P257出土。

6 遺構検出出土遺物（第34図、図版18）

34図1～14は遺構検出で出土した遺物である。1は弥生土器の小型の甕である。口頸部はく字状で、体部中程までは厚みは均一だが、底部付近で厚みが増す。調整は外面に刷毛目、内面は板状工具によるナデの擦痕が残る。口径10.0cmで完形品である。2は弥生土器の支脚である。脚部の端部を欠損するが、9割以上残存する完形品である。天井部は左右で高さが異なるが、円形状を呈する。調整は外面に粗いタタキ、内面に刷毛目と指ナデが明瞭に残る。3は土師器の坏である。体部中程は厚みがあるが、口縁部や底部は薄く作られている。胎土は精錬された土を使用する。調整はナデであるが、外面底部付近は粗いケズリを施す。復元口径16.0cm。4は青磁の碗口縁部片か。5～7は磁器の碗片である。7は外面に雲、高台内銘款に「大明年製」などの4文字を省略したものか。8～10は磁器の皿片である。8は内面に扇面か、9は内面の見込みに五弁花文と圏線2条、外面には圏線のみ3条描く。10は外面に唐草文を描き、高台内銘款にも僅かに描かれるが、内容は不明である。11は火入れの底部片か。内面底部は蛇の目釉剥ぎを施す。12は陶器の小皿である。内面には鉄釉が塗られ、外面底部は糸切りである。13は陶器の鉢である。内面に白化粧土で格子目文を施す。14は瓦質土器の大型の甕口縁部である。図版18は墓石である。圃場整備時に墓地の移転の際に、残ったものか。正面には上部を欠損するが、「周 保 信」と名が記されている部分は一段深く掘られている。「保 信」の右横には「子」という字が記されている。また「信」の左横にも何か文字が記されているが、残りが悪く解読不明である。なお側面には「甚？八 事」と記されている。明治以降のものか。

IV まとめ

今回の十郎丸長谷古遺跡についてまとめると、弥生時代後期と奈良時代、鎌倉時代、江戸時代の遺構と遺物が出土した。

弥生時代後期の遺構は、1・2号竪穴遺構、1号土坑がある。これらの遺構から出土した複合口縁壺・甕・鉢の底部が平底であることから、弥生時代後期前半頃の高三瀦式頃ではないかと思われる。一部、1号竪穴遺構の8図11の複合口縁壺のような頸部が短く、口縁部も角張った形状から下大隈式に近いものもある。また9図24・25は接合した結果、中型棺と呼ばれるサイズの甕棺と思われるものが出土した。検出時には甕棺としての掘り方はなく、他の土器と同様に廃棄されたような状況であった。遺構内は土器を多く廃棄したような状況であったが、その中に甕棺として埋置されていた可能性もあるのかもしれない。

後期後半として、1号甕棺と2号竪穴遺構の甕棺片（11図16～19）がある。3・4号土坑にも丸底の甕底部片（15図1）や鉢（16図4）があることからこの時期の可能性はある。

奈良時代については、今回検出したすべての竪穴住居跡と掘立柱建物跡・土坑がある。特に6号竪穴住居跡・8号竪穴住居跡などでは完形の須恵器坏（22図1）や土師器坏（22図2・3 26図5・6）などの遺物が出土しており、小田編年Ⅶ期又は田崎博之による干潟遺跡（小郡市）の編年から8世紀前半から中頃と思われる。他の竪穴住居跡も同時期である。

住居のカマドについては4基ほどしか確認できなかったが、すべて突出型のカマドであり、外側

に煙道が延びて行くタイプであることが分かった。唯一、1棟のみ掘立柱建物跡を検出したが、遺物は小片しか出土しなかったため明確な時期の判断に悩むが、他の住居と同時期であると思われる。

周囲には、この時期の遺構は確認されていないが、今後周辺調査により、集落の規模が判明してくると思われる。

鎌倉時代では、唯一検出した14号溝がある。出土した青磁碗片から12世紀頃と判断した。周辺にも同時期の遺構に注意する必要があるのかもしれない。

江戸時代では、ほとんどの溝がこの時期に該当する。上層から出土した近世陶磁器から17世紀代と思われる。溝は水の取水や排水にかかわるもので、東西・南北の格子状に溝が掘られている。時間や労力などから全部の掘削まではできなかったが、近代の遺物は全く検出されなかったので、上層出土の遺物から少なくとも江戸時代に埋没した溝と判断した。

道路をはさんだ北側でトレンチを1ヶ所いれて確認したが、遺構は確認できなかった。今後、北東側への調査が始まるので、何らかの成果がでるのではないかと期待する。

(参考文献)

- 田崎博之 1980 『Ⅲ 干潟遺跡出土土器の編年』『干潟遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第59集 福岡県教育委員会
池辺元明・水ノ江和同 1993 『定格遺跡 餅田遺跡 付篇八勝負遺跡』北野町文化財調査報告第1集 北野町教育委員会
堀田秀茂・馬田弘稔 1995 『古賀ノ上遺跡1』北野町文化財調査報告書第2集 北野町教育委員会
本田岳秋 1996 『今寺遺跡』北野町文化財調査報告書第3集 北野町教育委員会
堀田秀茂 1996 『赤司一区公民館遺跡』北野町文化財調査報告書第4集 北野町教育委員会
堀田秀茂 1996 『良積遺跡Ⅰ』北野町文化財調査報告書第5集 北野町教育委員会
本田岳秋 1997 『北野町遺跡等詳細分布調査報告書』北野町文化財調査報告書第6集 北野町教育委員会
本田岳秋 1997 『赤司城跡』北野町文化財調査報告書第7集 北野町教育委員会
本田岳秋 1997 『陣屋堂出遺跡』北野町文化財調査報告書第8集 北野町教育委員会
本田岳秋 1997 『茶屋敷遺跡』北野町文化財調査報告書第9集 北野町教育委員会
本田岳秋 1998 『仁王丸遺跡』北野町文化財調査報告書第10集 北野町教育委員会
本田岳秋 1998 『良積遺跡Ⅱ』北野町文化財調査報告書第11集 北野町教育委員会
本田岳秋 1999 『良積遺跡Ⅲ』北野町文化財調査報告書第12集 北野町教育委員会
本田岳秋 1999 『中厨子田遺跡』北野町文化財調査報告書第13集 北野町教育委員会
飛野博文・本田岳秋 2000 『北大手木遺跡』福岡県文化財調査報告書第151集 福岡県教育委員会
本田岳秋 2001 『古賀ノ上遺跡2』北野町文化財調査報告書第14集 北野町教育委員会
飛野博文・吉村靖徳・本田岳秋 2002 『彼坪遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第167集 福岡県教育委員会
本田岳秋 2002 『大城小学校校庭遺跡』北野町文化財調査報告書第15集 北野町教育委員会
飛野博文・杉原敏之・下山正一 2003 『彼坪遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第182集 福岡県教育委員会
本田岳秋 2003 『金鳥馬場遺跡』北野町文化財調査報告書第16集 北野町教育委員会
本田岳秋 2003 『大城中筒井遺跡』北野町文化財調査報告書第17集 北野町教育委員会
本田岳秋 2004 『仁王丸古墳』北野町文化財調査報告書第18集 北野町教育委員会
本田岳秋 2004 『古賀ノ上遺跡3』北野町文化財調査報告書第19集 北野町教育委員会
本田岳秋・高田知恵 2004 『古賀ノ上遺跡4』北野町文化財調査報告書第20集 北野町教育委員会
重藤輝行・吉村靖徳・吉田東明 2005 『彼坪遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第202集 福岡県教育委員会
本田岳秋 2005 『良積遺跡Ⅳ』北野町文化財調査報告書第21集 北野町教育委員会
本田岳秋・高田知恵 2005 『良積遺跡Ⅴ』久留米市文化財調査報告書第214集 久留米市教育委員会
白木守・本田岳秋・小澤太郎・熊代昌之・原田志保 2007 『久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅸ』久留米市文化財調査報告書第253集 久留米市教育委員会
江頭俊介 2013 『稲数遺跡一第1次調査一』久留米市文化財調査報告書第330集 久留米市教育委員会
大隈彩未 2018 『古町遺跡 第1次調査調査報告』久留米市文化財調査報告書第396集 久留米市教育委員会
熊代昌之・大隈彩未 2019 『久留米市埋蔵文化財調査集報ⅩⅨ』久留米市文化財調査報告書第412集 久留米市教育委員会
橋口達也 2005 『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣



1 十郎丸長谷古遺跡合成写真(真上から)



1 調査区南側全景（真上から）



2 調査区北側全景1（真上から）



3 調査区北側全景2（真上から）



1 遺跡周辺（東から）



2 遺跡周辺（南西から）



3 遺跡周辺（北から）



1 1号竪穴遺構（南東から）



2 1号竪穴遺構土器出土状況（南東から）



3 2号竪穴遺構（南西から）



1 甕棺（東から）



2 甕棺（南から）



3 1号土坑（南から）



4 3号土坑（南から）



1 1号堅穴住居跡（南から）



2 2・3号堅穴住居跡（南東から）



3 2号堅穴住居跡竈（南東から）



4 3号堅穴住居跡竈（南東から）



1 2号竪穴住居跡 (南東から)



2 4号竪穴住居跡 (西から)



3 6号竪穴住居跡 (南から)



1左 6号竪穴住居跡竈（南から）
2右 6号竪穴住居跡土器出土状況
（南東から）
3 7～9号竪穴住居跡（南東から）

4 8号竪穴住居跡（南東から）



1 10号竪穴住居跡(東から)



2左 10号竪穴住居跡竈(東から)



3右 11号竪穴住居跡(南東から)



4 12号竪穴住居跡(南から)



1 1号掘立柱建物跡（北東から）



2左 P201（南西から）

3右 2号土坑（南西から）



4 1・2号溝（南から）



5 1号溝土層（南から）



6 2号溝土層（南から）



1 3号溝 (西から)



2 4号溝 (南から)



3 4号溝土層 (南から)



4 5号溝西1 (東から)



5 5号溝西2 (西から)



6 5号溝土層a (西から)



7 5号溝土層b (東から)



8 6号溝 (東から)



1 6号溝土層 a (東から)



2 6号溝土層 b (東から)



3 12・13号溝 (西から)



4 14号溝 (東から)



5 18号溝北 (南から)



6 18号溝北土層 (南から)



7 18号溝南 (南から)



8 18号溝南土層 (南から)



1 19号溝土層(北から)



2 19号溝土層a(北から)



3 19号溝土層b(北から)



4 20号溝土層(東から)



5 21号溝(西から)



6 21号溝土層(西から)



7 22号溝(西から)



8 22号溝土層(西から)



6-1



8-14



6-2



9-24



7-8



8-15



9-25



出土土器2







報 告 書 抄 録

ふりがな	じゅうろうまるはせこいせき							
書 名	十郎丸長谷古遺跡							
副 書 名	主要地方道久留米筑紫野線建設事業関係調査報告							
巻 次	13							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 280 集							
編著者名	坂本真一							
編集機関	九州歴史資料館							
所 在 地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3 TEL 0942-75-9575							
発刊年月日	西暦 2023 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じゅうろうまる 十郎丸 はせこいせき 長谷古遺跡	ふくおかけんく るめし 福岡県久留米市 きたのまちはせこ 北野町長谷古	40203		33° 20' 42"	130° 34' 25"	2020.11.9 ～ 2021.3.22 2021.5.24 ～ 2021.6.11	4000㎡	主要地方道 久留米筑紫野線 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
十郎丸 長谷古遺跡	集落	弥生時代 奈良時代 鎌倉時代 江戸時代	竪穴遺構 2 基 甕棺墓 1 基 土坑 3 基 掘立柱建物跡 1 棟 竪穴住居跡 11 軒 土坑 1 基 溝 1 条 溝 18 条	弥生土器 甕棺 弥生土器 須恵器・土師器 須恵器・土師器 青磁碗 近世陶磁器				
要約	弥生時代・奈良時代・鎌倉時代・江戸時代の遺跡で、竪穴遺構・甕棺墓・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝を検出した。							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120261
登録年度 4	登録番号 2

福岡県文化財調査報告書 第280集

十郎丸長谷古遺跡

令和5年3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

